河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡

— 大分県竹田市稲葉川河川改修工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ —

1995

大分県教育委員会

序　　文

大分県竹田土木事務所では、平成３年度より竹田市北部を流れる稲葉川流域の河川災害の防止と周辺の環境整備を図るため、河川改修工事に着工しましたので、大分県教育委員会としても工事対象地区の数多くの埋蔵文化財の事前調査を継続して行なってまいりました。

このうち、本書には平成６年度に行われた「河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡」の調査成果を収録したものです。河内谷は現在の竹田市挟田地区に位置し、毎年秋にはこの地区の「三日月岩」の前で薪能が奉納されていますが、この場所が元禄年間に五代藩主中川久通によって建てられた河内谷御茶屋の跡なのです。発掘調査では御茶屋跡の遺構や馬場の土塁などが検出され、当時の藩主の生活の一端を示す貴重な資料が得られました。また竹田土木事務所の協力により、検出された遺構は調査後も破壊されることなく、埋め戻しを行い、将来の活用に向けて当分の間地下に保存されることになりました。

今回の調査にご協力いただいた関係各位に対し、深く感謝を表しますとともに、厚くお礼を申し上げます。また、今後とも埋蔵文化財の調査・保存とその活用に対し、ご理解とご協力をいただけますようよろしくお願いいたします。

平成７年３月

大分県教育委員会
教育長　帯　刀　将　人

例　　言

1．本書は、平成５・６年度（1993・1994年度）に発掘調査を実施した稲葉川河川改修工事に伴う河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡（大分県竹田市大字挟田37～17－２）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は大分県竹田土木事務所の委託事業として、大分県教育委員会が実施した。

3．調査団の構成は、以下の通りである。

調査総括　　末広　利人（大分県文化課長）
調査主任　　渋谷　忠章（大分県文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長）
調 査 員　　玉永　光洋（大分県文化課主査　平成５・６年度）
　　友岡　信彦（大分県文化課主任　平成５年度）
　　吉田　　寛（大分県文化課主任　平成６年度）
　　神崎　哲也（大分県文化課嘱託　平成５年度）
　　橋本　幸治（大分県文化課嘱託　平成６年度）

4．現地での発掘調査の際、城戸誠・佐伯治（以上竹田市教育委員会）・後藤幹彦（大野町教育委員会）の各氏が来訪され、種々の御教示・御助言を得た。

5．本書で使用した遺構・遺物の実測図は調査員が作成し、遺物実測・トレースには末吉香代・末政圭子（大分県文化課資料室）の援助を得た。

6．本書で使用した航空写真測量図は株式会社パスコが作成したものを、本報告書用に編集したものである。また、本書で使用した航空写真は、パスコおよびスカイサーベイ社の撮影による。

7．本書の編集・執筆は、吉田寛が行なった。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．発掘調査区の歴史的環境 …… 2
Ⅲ．発掘調査の成果
(1) 調査の概要 …… 9
(2) 河内谷御茶屋跡の調査 …… 11
(3) 河内谷馬場跡の調査 …… 22
(4) 中川久祐屋敷跡の調査 …… 35
(5) 縄文時代包含層の調査 …… 41
Ⅳ．まとめに代えて
(1) 河内谷馬場の復元 …… 54
(2) 岡城から河内谷へ …… 55
(3) 結び …… 58
余　録 …… 59

図版目次

第１図　岡藩の領域 …… 2
第２図　岡城関連遺跡と周辺地形図 …… 3
第３図　河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡の位置と関連遺跡 …… 5・6
第４図　河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡発掘調査全体図 …… 7・8
第５図　『岡城城下家中図』に見える河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡 …… 9
第６図　河内谷御茶屋跡遺構配置図 …… 12
第７図　河内谷御茶屋跡ＳＤ１ …… 13
第８図　河内谷御茶屋跡ＳＤ１出土遺物 …… 13
第９図　河内谷御茶屋跡ＳＤ３出土遺物 …… 13
第10図　河内谷御茶屋跡ＳＤ３・礎石列 …… 14
第11図　河内谷御茶屋跡ＳＤ４・ＳＤ５ …… 14
第12図　河内谷御茶屋跡ＳＤ４出土遺物 …… 15
第13図　河内谷御茶屋跡ＳＤ６ …… 15
第14図　河内谷御茶屋跡ＳＤ２・階段遺構ＳＳ１ …… 17・18
第15図　河内谷御茶屋跡ＳＤ２出土遺物 …… 17・18
第16図　河内谷御茶屋跡ＳＳ１出土遺物 …… 17・18
第17図　『岡城城下家中図』に見える階段遺構ＳＳ１ …… 19
第18図　河内谷御茶屋跡土坑 …… 20
第19図　河内谷御茶屋跡土坑出土遺物 …… 20
第20図　河内谷御茶屋跡下層遺構面出土遺物 …… 21
第21図　河内谷馬場跡土塁断ち割り調査トレンチ断面図 …… 23・24
第22図　河内谷馬場跡遺構配置図 …… 25
第23図　トレンチおよび土塁周辺出土遺物 …… 27

第24図　『岡城城下家中図』に見える階段遺構ＳＳ１ …… 27
第25図　河内谷馬場跡階段遺構ＳＳ１ …… 27
第26図　河内谷馬場跡ＳＤ１ …… 29
第27図　『岡城城下家中図』に見える道の屈曲部 …… 30
第28図　河内谷馬場跡ＳＶ１・ＳＶ２の位置 …… 30
第29図　河内谷馬場跡ＳＶ１・ＳＶ２ …… 31･32
第30図　河内谷馬場跡ＳＶ１周辺出土瓦 …… 33
第31図　河内谷馬場跡ＳＶ１周辺出土銅印 …… 33
第32図　中川久祐屋敷跡遺構配置図 …… 35
第33図　中川久祐屋敷跡ＳＶ１ …… 36
第34図　中川久祐屋敷跡ＳＤ１出土遺物 …… 37
第35図　中川久祐屋敷跡ＳＤ１ …… 37
第36図　中川久祐屋敷跡ＳＫ１～ＳＫ３ …… 38
第37図　中川久祐屋敷跡ＳＫ１出土遺物 …… 39
第38図　中川久祐屋敷跡ＳＫ２出土遺物 …… 40
第39図　中川久祐屋敷跡ＳＫ１・ＳＫ２出土瓦刻印 …… 40
第40図　中川久祐屋敷跡ＳＫ３出土遺物 …… 40
第41図　第２トレンチ出土縄文土器 …… 41
第42図　縄文晩期包含層調査地点 …… 42
第43図　茶屋地区下層縄文包含層遺物出土状況 …… 43･44
第44図　馬場地区下層縄文包含層遺物出土状況 …… 45･46
第45図　茶屋地区下層縄文包含層出土遺物① …… 47
第46図　茶屋地区下層縄文包含層出土遺物② …… 48
第47図　茶屋地区下層縄文包含層出土遺物③ …… 49
第48図　馬場地区下層縄文包含層出土遺物① …… 49
第49図　馬場地区下層縄文包含層出土遺物② …… 50
第50図　馬場地区下層縄文包含層出土遺物③ …… 51
第51図　馬場地区下層縄文包含層出土遺物④ …… 52
第52図　縄文晩期包含層に混入した中・近世の遺物 …… 53
第53図　河内谷馬場の復元想定 …… 54
第54図　岡城から河内谷へ（その１） …… 56
第55図　岡城から河内谷へ（その２） …… 57
第56図　「ヤマトク」の刻印をもつ「いげ皿」 …… 59

表　目　次

第１表　岡藩歴代藩主 …… 2
第２表　河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡関連事項 …… 10

Ⅰ．調査に至る経過

大分県南西部に位置する竹田市は北側を久住山、西側を阿蘇外輪山、南側を祖母連山に囲まれ、西端部は熊本県境に接する。その地勢は阿蘇火山を起源とする火砕流が扇状に広がり、扇骨状に河川が流れ、侵食していくつもの台地と渓谷を形成する。現在の市街地は北側に稲葉川、南側に玉来川が流れる標高約240m前後を測る台地麓に位置している。

竹田市街地の北側を流れる稲葉川は、九重山麓にその源を発し、東側の大野郡緒方町との境付近で本流の大野川と合流する。その川幅は狭小、流れは急流で蛇行が多く、多量の降雨があった時には河川災害が勃発しやすい危険な状況にある。近年でも、1993年８月の台風13号がもたらした風水害では、市街地中心部が大きな被害を受けたことは記憶に新しいところである。このような状況から、大分県竹田土木事務所では、1992年度より河川流域の災害防止と周辺の環境整備を目的とした河川改修工事事業に着手した。この工事に先立ち、土木事務所サイドから大分県教育庁文化課に工事対象地区の埋蔵文化財の有無に対する照会があり、事前協議の申し入れがなされた。これを受けて、大分県文化課では工事対象地区が江戸時代の豊後岡藩城下町の一角に相当しており、対象地区の大部分で近世の遺構・遺物が発見される可能性が高く、工事施工にあたっては埋蔵文化財の調査との調整を図る必要があることを回答した。これ以降、大分県竹田土木事務所と大分県教育庁文化課では双方の各担当者レベルでの協議を重ね、河川改修工事の計画と進捗状況に合わせて、順次埋蔵文化財に関する試掘調査・発掘調査を実施することとした。

稲葉川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、1992年度より開始された。92年度には稲葉川に架けられていた古町橋の遺構や明治時代の製糸工場跡が検出された「浦町遺跡」（竹田市浦町）、93年度には岡藩中級武士である上家・武藤家の武家屋敷跡である「向山手遺跡」（竹田市飛田川風ヶ渕字向山手）、94年度には五代藩主中川久通により造営された御茶屋や馬場跡が存在した「河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡」（竹田大字挟田）が調査されており、当初の予測通り、近世の岡藩城下町関連の遺跡が充実している。95年度以降も、岡藩校由学館の跡地の調査などが予定されている。また稲葉川の現河岸付近に露出する岩盤には、江戸時代以前に造営されたと思われる橋梁の柱穴や造り出しの階段などが残存する地点があるが、これらの遺構も河川改修工事に伴い大部分が消滅する運命にある。そこで93年度の補足調査として、河川流域の航空測量を行い、大縮尺の測量図上に上記遺構群をプロットすることにより、当該遺構群の記録保存としている。

浦町遺跡・向山手遺跡では陶磁器類を主体とした膨大な出土遺物が認められ、現在も遺物整理を継続している。また、河川流域の遺構群や向山手遺跡の武家屋敷石垣なども、現在航空写真測量業者との間で、測量図を調整中である。従って、本書では発掘調査および遺物整理がいち早く完了した「河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡」の調査成果を収録し、大分県教育委員会を主体とした正式報告である「大分県竹田市稲葉川河川改修工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ」として刊行するものである。

今回の河川改修に伴う一連の発掘調査と、竹田市教育委員会が進めている岡城整備計画事業に伴う発掘調査および民間開発等に伴う岡藩城下町の緊急調査によって、竹田市域における近世遺跡の調査事例が確実に蓄積されつつある。近世遺跡の主体となる現市街地での調査については、予測以上の困難に直面する場合も多いが、他時期の遺跡と同様に地下に埋没する遺構・遺物に対して、できうる限りの対応を行なわなければならない。そして、調査に携わる我々は遺跡から得られる情報を最大限収集し、迅速な調査成果の公表を行なったうえで、近世考古学が新たな歴史叙述に最大限寄与できる役割を模索したい。

本書の刊行は上記の目標への第一歩であり、その目的に少しでも接近することができれば、編集者にとって深甚である。

Ⅱ．発掘調査区の歴史的環境

本書で収録した遺跡の内容は近世を主体としたものであるため、本項目では江戸時代を中心とした歴史的環境について触れておきたい。

江戸時代の幕末段階における大分県は八藩七領に分割されており、いわゆる「小藩分立」の状況を呈していた。八藩とは奥平氏10万石の中津藩、能見松平氏3.2万石の杵築藩、木下氏2.5万石の日出藩、大給松平氏2.22万石の府内藩、久留島氏1.25万石の森藩、稲葉氏５万石余の臼杵藩、毛利氏２万石の佐伯藩、中川氏７万石の岡藩である。このうち今回問題とする岡藩は、現在の行政区分の竹田市・直入郡荻町・大野郡朝地町・大野郡大野町・大野郡緒方町・大野郡清川村・南海部郡宇目町と直入郡久住町・直入郡直入町・大分郡庄内町・大分郡野津原町・大野郡犬飼町・大野郡千歳村・大野郡三重町の一部がその領域であった（第１図）。この岡藩の概況を瞥見しておきたい。

第１図　岡藩の領域

中世段階における豊後は、戦国大名大友氏が領有する地域であった。文禄２年（1593）、朝鮮半島出兵（文禄の役）の際に失態を犯した大友義統（吉統）は、豊臣秀吉により豊後国を没収される。その後、秀吉は豊後国を自らの直轄地（太閤蔵入地）とし、大分郡府内・直入郡岡・海部郡臼杵・国東郡高田・同郡富来・同郡安岐・日田郡隈の各地に、豊臣系の武将を大名兼蔵入地代官として入部させる。直入郡岡には播磨国三木城より中川秀成が6.6万石（後に７万石）で入部し、以来幕末まで転封や断絶を経ることなく、13代の藩主が輩出することになる（第１表参照）。

文禄３年（1594）に入部した中川秀成は、中世段階の志賀氏の城である「岡城」を居城と決め、城の拡張工事を開始する。その結果、中世段階と比較して城郭の中心が西側に移動したと思われ、天神山に本丸を構え、旧岡村付近に上級家臣の屋敷地を設けた。大手門は滑瀬から登った旧滑瀬口に構築し、慶長18年（1613）には西向きに築き直されている。さらに旧岡村北方の近戸谷に向かって江戸門を築き、中世段階の大手門であった下原門を

代	姓名	受領名･官名	通称	生年月日	没年月日	戒名	菩提所	就任・退任月日
1	中川秀成	修理大夫	小兵衛	元亀１(1570)	慶長17(1612)・8・14	碧雲寺殿	碧雲寺（竹田市）	文禄３（1593）・2・13 慶長17（1612）・8・14
2	中川久盛	内膳正		元亀３(1572)・7・15	承応２(1653)・3・18	法台院	碧雲寺（竹田市）	慶長17（1612）・8 承応２（1653）・3・18
3	中川久清	山城守	瀬兵衛	慶長20(1615)・1・10	天和１(1681)・11・20	宝厳院	碧雲寺（竹田市）	承応２（1653）・5・21 寛文６（1666）・4・29
4	中川久恒	佐渡守		寛永18(1641)・7・26	元禄８(1695)・6・15	宝浄院	碧雲寺（竹田市）	寛文６（1666）・4・29 元禄８（1695）・6・15
5	中川久通	因幡守		寛文３(1663)・5・28	宝永７(1710)・2・28	天真院	碧雲寺（竹田市）	元録８（1695）・8・9 宝永７（1710）・2・28
6	中川久忠	内膳正		元禄11(1698)・2・24	寛保３(1743)・10・13	通玄院	碧雲寺（竹田市）	宝永７（1710）・4・23 寛保２（1742）・10・13
7	中川久慶	山城守		宝永５(1708)・3・8	寛保３(1743)・10・30	巍燃院	青松寺（東京都）	寛保２（1742）・12・19 寛保３（1743）・10・30
8	中川久貞	修理大夫		享保９(1724)・1・19	寛政２(1790)・5・20	諦考院	碧雲寺（竹田市）	寛保３（1743）・12・21 寛政２（1790）・5・20
9	中川久持	修理大夫		天明６(1786)・閏10・17	寛政10(1798)・9・18	厳祇院	碧雲寺（竹田市）	寛政２（1790）・7・12 寛政10（1798）・9・18
10	中川久貴	修理大夫		天明７(1787)・4・2	文政７(1824)・10・20	太玄院	青松寺（東京都）	寛政10（1798）・11・29 文化12（1815）・9・5
11	中川久教	修理大夫		寛政12(1800)・7・1	天保11(1840)・9・28	大鑑院	碧雲寺（竹田市）	文化12（1815）・9・5 天保11（1840）・9・28
12	中川久昭	修理大夫		文政３(1820)・4・4	明治22(1890)・11・30		青山共葬墓地(東京都)	天保11（1840）・12・6 明治２（1869）・9・23
13	中川久成	内膳正		嘉永３(1850)・8・4	明治30(1897)・5・2		青山共葬墓地(東京都)	明治２（1869）・9・23 明治４（1871）・7・14

第１表　岡藩歴代藩主（「大分歴史事典」915頁掲載表を一部改変）

第２図　岡城関連遺跡と周辺地形図（Ｓ＝１／25,000）

１．岡藩城下町　２．岡城跡　３．河内谷馬場跡・河内谷御茶屋跡　４．向山手遺跡　５．浦町遺跡

６．中川家墓所おたまや公園（碧雲寺）　７．岡藩銭座跡　８．愛染堂　９．御客屋（藩営の宿泊所）

10．滝廉太郎旧宅　11．旧竹田荘　12．藩校由学館跡　13．願成院跡　14．三宅瓦窯跡

搦手門とした。秀成の城普請は、慶長元年（1596）にほぼ完成したといわれている。また三代藩主中川久清の時期の寛文４年（1664）には西ノ丸に殿舎が建てられるなど、城郭内部の設備の拡充が進んでいる。岡城のいわゆる天守閣は三重櫓で、本丸南角の石垣上に存在した。明和８年（1771）には城内に大火災が起こり、本丸・西ノ丸・御廟等の多くの建物が焼失したが、その後天守閣をはじめとした建物の復興が進み、幕末段階までかなりの建造物が残っていた。ただし、これらも明治維新後すべて取り壊され、石垣を残すのみとなった。現在の岡城跡は国指定史跡に指定されており、竹田市教育委員会によって史跡整備事業に伴う発掘調査が継続中である。

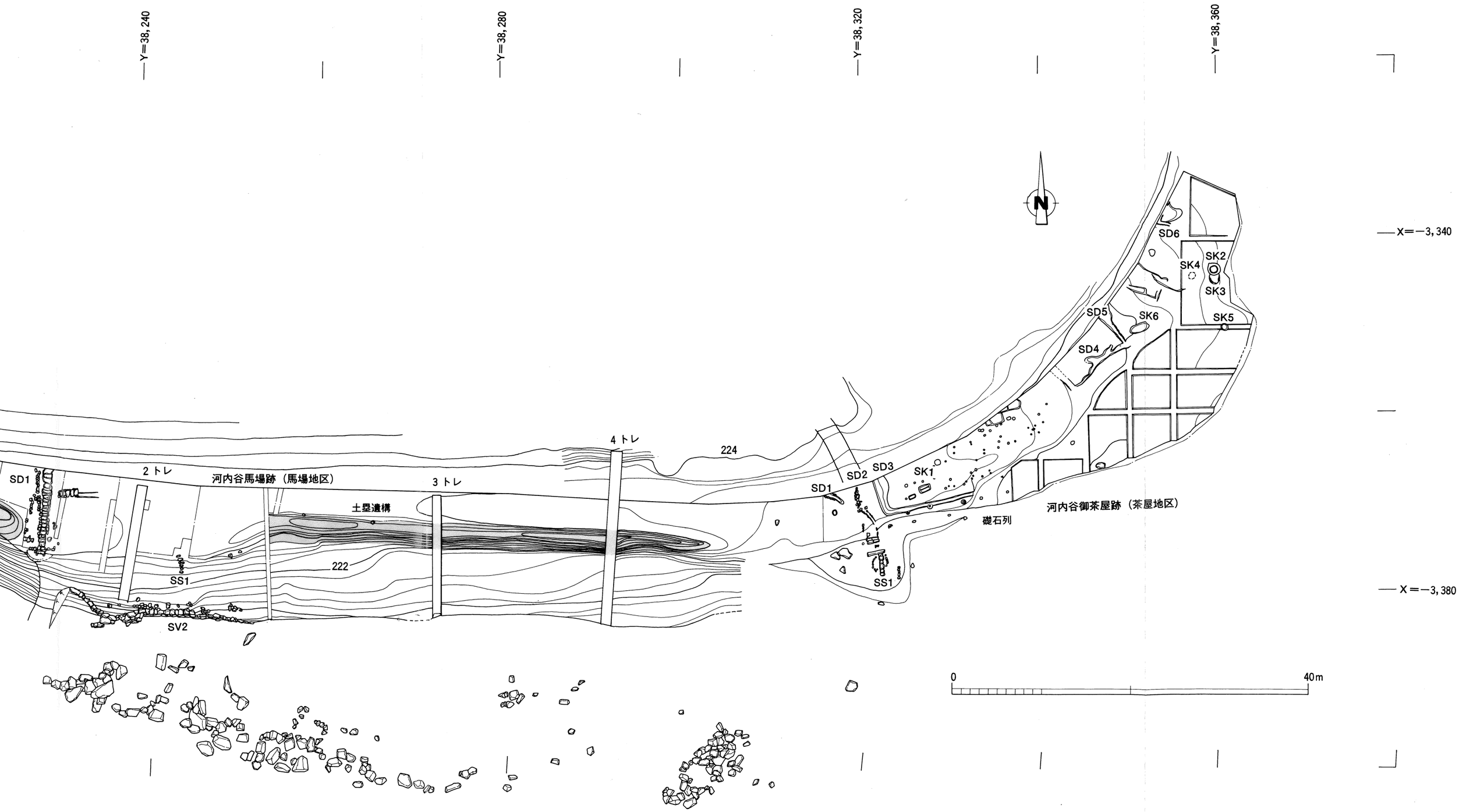
岡城の築城と並行して、城下町の建設も行なわれた。中川入部当時の竹田村は湿田地帯で、周辺の山際に数戸の民家が存在する寒村だったといわれている。城下町建設を担当した丸山藤左衛門は湿田を埋め、藪や林を切り開き、玉来地区から53軒の民家を、さらに十川や挟田地区からも民家を移して町屋の建設も始めた。寛永７年（1630）には竹田村のままのこっていた古町を竹田町（城下町）に編入し、武家屋敷も建設されるようになる。天保年間（1830～1843）前後には、町数は本町・上町・新町・府内町・古町の６町で、本町内に寺町筋・上之横小路・中横小路・八幡小路・下横小路の５小路があり、古町内には上横小路・下横小路・慶順川小路・向丁小路の４小路が存在した。

城下の調査は大分県教育委員会による稲葉川河川改修工事に伴う事前調査のほかにも、竹田市教育委員会を主体とする発掘調査がある。中川家墓所おたまや公園では、1990年度から1992年度にかけて史跡公園整備に伴う発掘調査が行なわれている。おたまや公園は岡藩主の菩提寺である碧雲寺の墓地庭園区域に相当し、中川秀成が慶長12年（1612）春に建築を開始した御茶屋を、秀成の死去によって建築計画を変更し、菩提寺である碧雲寺として造営されたものである。発掘調査では碧雲寺の旧伽藍と推定される礎石や溝、園池である龍吟池などが調査されている。碧雲寺には万延元年（1860）に作成された良好な絵図が残存しており、発掘調査の成果との対比が興味深く、その詳細が公表されることが期待される。1988・1991年度には、竹田市浦町の「岡藩銭座」と推定される地区で、個人住宅・病院建設に伴う発掘調査が行なわれている。岡藩銭座は寛永13年から16年（1636～1639）にかけて、竹田古町の調査地点付近に存在していたことが文献に記されている。発掘調査では坩堝や砥石など、寛永通宝鋳造に使用したと思われる遺物が出土したものの、遺構面の攪乱が著しく、寛永期の銭座関連の遺構の検出には成功していない。1991年度の調査区では明治時代初期の石組竈遺構が検出され、大分県教育委員会が浦町遺跡で検出した遺構との関連が注目される。その他、岡城関連の周辺遺跡として調査された「願成院跡」、環境整備事業計画に伴う発掘調査がなされた「滝廉太郎旧宅」など、考古学的な調査が行なわれている地点が数箇所存在するが、いずれもその詳細が公表されていない。

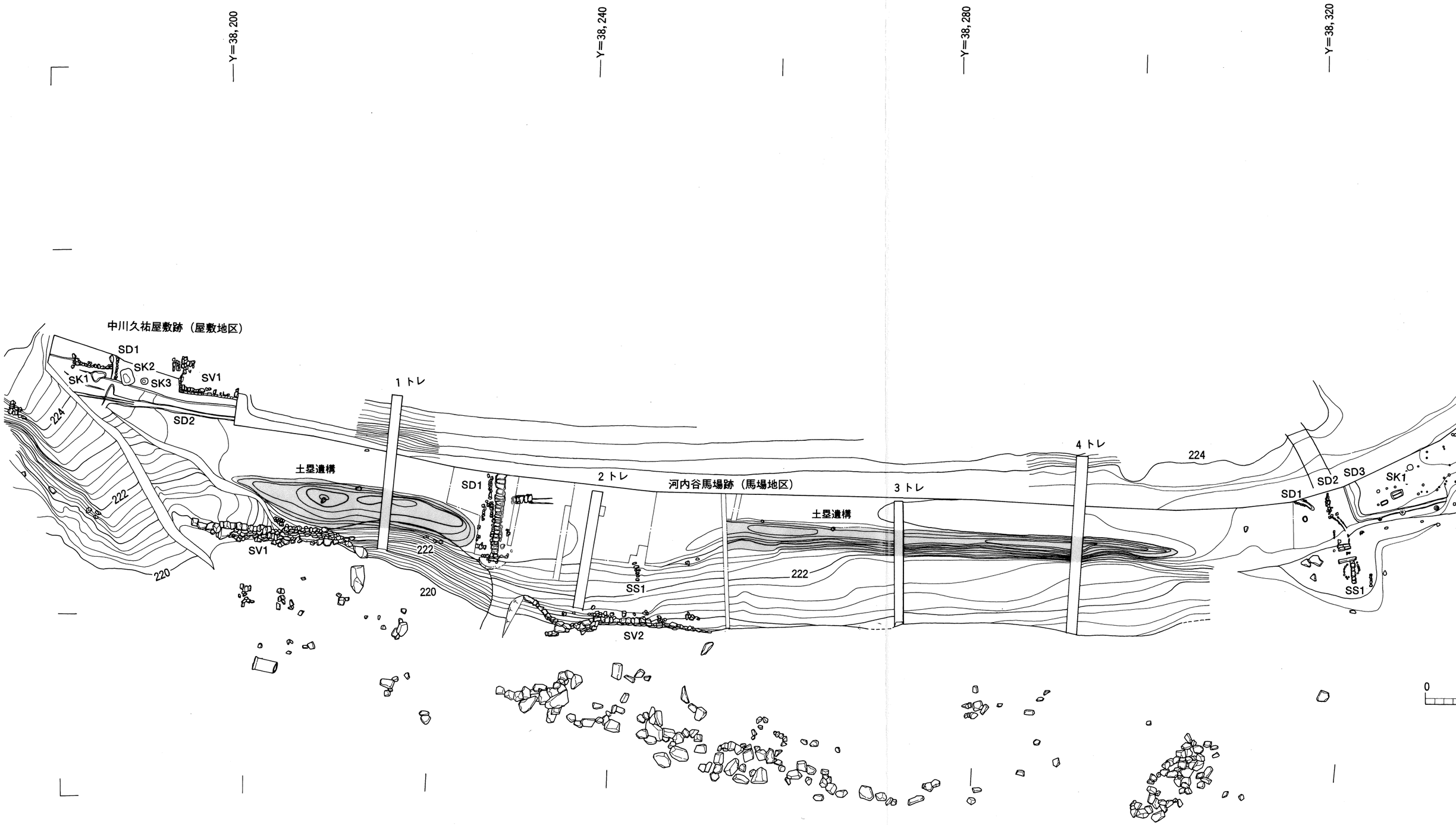
今後は大分県教育委員会・竹田市教育委員会が行なった城下町関連遺跡の調査成果を総合的に検討して、近世の生活の具体像を探求してゆく必要性が痛感される。

（参考文献）株式会社大分放送大分歴史事典刊行本部『大分歴史事典』（1990年）
大分県総務部総務課『大分県史』近世篇Ⅱ（1985年）
竹田市史刊行会『竹田市史』（1984年）
大分県竹田市『歴史の道―岡城跡と城下町竹田―』（1993年）
大分県教育委員会『大分県埋蔵文化財年報』１・２（1993・1994年）
竹田市教育委員会『史跡岡城跡』Ⅰ～Ⅷ（1986～1993年）
同上『史跡岡城跡　賄方跡発掘調査報告』（1988年）
同上『岡藩主おたまや公園整備事業報告書』Ⅰ～Ⅲ（1990～1992年）
同上『岡藩銭座跡』（1989年）
同上『岡藩銭座跡発掘調査報告書』（1992年）

第３図　河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡の位置と関連遺跡（Ｓ＝１／8,000）



第４図　河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡発掘調査全体図（Ｓ＝１／400）



第４図　河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡発掘調査全体図（Ｓ＝１／400）

Ⅲ．発掘調査の成果

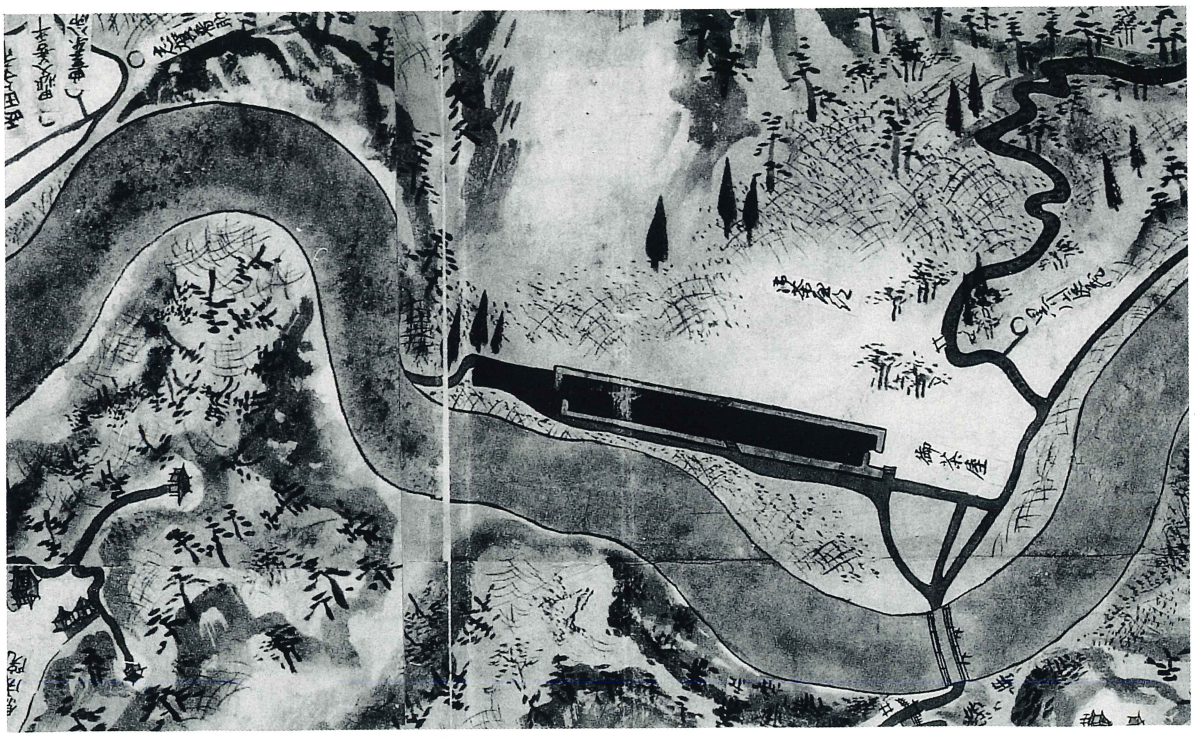
⑴　調査の概要

河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡は、稲葉川北岸の河岸段丘（第一段丘）上に位置する。遺跡の南側では稲葉川が大きく蛇行しており、当該地点が河川改修工事の対象となっている。調査区南端から数mで稲葉川の川原に達し、周辺には拳大の川原礫や砂質土が堆積している。

遺跡の基本層序は地点によって小異があるが、表土は1993年８月の台風13号による河川氾濫に起因する砂質土であり、層厚30㎝以上の堆積が認められる地点も存在する。その下位は遺跡の廃絶後（近代以降）に形成された水田の旧耕作土と床土である。以上の層を除去すると、最終段階の遺構面に達する。

河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡の発掘調査区は、河川改修工事地区に対応するもので、東西に長い弓なりの形状を呈している（第４図）。発掘調査面積は約7,600㎡である。調査対象地点の一部には、発掘調査以前から馬場の施設と推定された土塁遺構が残存していた。後で詳しく触れる『岡城城下家中図』[1]（第５図参照。天明７年＝1787作成）によると、馬場の土塁に隣接して「御茶屋」の文字が見え、この付近が「河内谷御茶屋・河内谷馬場跡」であることが推定された。また、稲葉川を挟んだ対岸は岡城二ノ丸に至る絶壁で、この崖面には地元で「三日月岩」と呼ばれている弦長約3.2m、最大幅0.45m、奥行0.35mを測る三日月形の彫り込みがみられる。三日月岩には「元禄一五年（1702）午八月彫之」の彫り込みが認められ、５代藩主中川久通（1663～1710）が当地に造営した「河内谷御茶屋」に関連する施設である。さらに、調査区西側には石垣遺構などが地表面で確認されており、この付近は地元で「雄三郎様屋敷」と通称される武家屋敷であったという伝えがあった。「雄三郎様」とは10代藩主中川久貴（1787～1824）の三男である中川久祐[2]（1813～1872）のことで、これも後に触れるように、この石垣遺構などが中川久祐の屋敷地の一部であることは、文献などとも合致している。

上記のように調査地点付近には、発掘調査以前から「河内谷御茶屋跡」・「河内谷馬場跡」および「中川久祐屋敷跡」の存在が予測されていた。そして予測通り、発掘調査に至る表土剝ぎの段階で、御茶屋・馬場・屋敷のそれぞれに対応すると思われる遺構が確認できた。従って、調査区を便宜的に西側から「御茶屋地区」・「馬場地区」・「久祐屋敷地区」の３ブロックに分け、それぞれの地区ごとに遺構番号を付して、調査を進めた。さらに、



第５図　『岡城城下家中図』に見える河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡

馬場の土塁遺構の断ち割り調査や遺構検出時の土層の観察から、近世の遺構面の下位に縄文時代晩期の遺物を含む包含層が確認された。この縄文時代晩期の包含層は、地点によって包含遺物の量的な差があるものの、調査区のほぼ全域に広がっている。以下、地点ごとの考古学的な調査の概要を記しておきたい。

元禄15年（1702）	河内谷御茶屋跡建設。
8月	三日月岩を彫る。（「元禄一五年午八月彫之」）
明和8年（1771）1月	岡城大火災で西ノ丸・本丸・御廟・下原門等を焼失。 御廟主を河内谷御茶屋へ仮に移す。
天明4年（1784）11月	御廟再建完成により、御廟主を再び河内谷御茶屋より移す。
文化10年（1813）3月	岡城にて中川雄三郎（10代中川久貴の三男）誕生。
文政8年（1825）2月	中川雄三郎、実名「久祐」と花押を進ぜられる。
4月	中川幹之丞（中川久貴の次男）・雄三郎、岡城より河内谷御茶屋へ引き移る。
文政10年（1827）12月	中川雄三郎、岡城内桜馬場住居へ引き移る。
天保4年（1833）9月	中川幹之丞死去。
天保5年（1834）5月	中川雄三郎、河内谷御別邸へ引き移る。
明治4年（1871）12月	中川雄三郎、病気につき帰京できず、当分の間岡藩内に居住することを願い出る。
明治5年（1872）9月	中川雄三郎死去。

第2表　河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡関連事項

河内谷御茶屋跡は『両郡古談』(3)に「同年（元禄15年＝1702）河内谷御茶屋建ツ。」の記述があり、5代藩主中川久通が造営した施設であったことがわかっている。また、『中川史料集』(4)中に明和8年（1771）の岡城大火災で焼失した御廟所に安置していた御廟主を、天明4年（1784）まで河内谷御茶屋に仮安置しておくという記述が見られるなど、岡藩藩主の関連施設として重要な位置にあったことがわかる。『中川史料集』中の河内谷御茶屋に関する記述は19世紀以降にも認められ、また今回の発掘調査で検出した遺構からも19世紀代に比定される遺物が出土していることから、施設の大部分が幕末段階まで存在した可能性が高い。発掘調査区は御茶屋跡の南端部に相当すると思われ、上下2層の遺構面を確認している。調査途中で遺跡の埋土保存の方向が決まったため、下層遺構は調査区北東端部のＳＤ６とその周辺を掘り下げたに過ぎない。下層の遺構面上からは1690～1740年代に比定できる肥前陶磁器や陶器瓶類および土師質土器などが出土しており、5代藩主中川久通による元禄15年（1702）の御茶屋建設の記録と矛盾しない遺物群である（第20図、21頁参照）。上層の遺構面からは溝・土坑・柱穴群・礎石・階段遺構などを検出しており、18世紀後半から19世紀代の遺物が出土している。また御茶屋地区の江戸時代の遺構面下には縄文時代晩期の遺物包含層があり、御茶屋関係の遺構が分布していない調査区南東側では、包含層の掘り下げを行ない、縄文時代の遺物を採集している。

河内谷馬場跡は、調査区の中央付近に土塁が残存している。馬場を構成する土塁遺構は、調査以前は南側のみが残っており、北側土塁および出入口（虎口）を有する東側・西側土塁はすでに消失していた。発掘調査では4箇所のトレンチによる土塁の断ち割り調査を行ない、その構築状況を観察した。その結果、東側の残存土塁では馬場の形成に伴う盛土が認められた。また、西側の残存土塁のみで2回の盛土作業の工程が確認され、周辺の遺構の状況から1回目は馬場の形成に伴うもの、2回目は後述する中川久祐屋敷建設に伴うものと推定された（馬場地区第1トレンチの土層図参照、23･24頁）。また竹田土木事務所と土地所有者の許可を受けて、工事対象地区外へトレンチの拡張を行ない、消失した北側土塁の痕跡をつかむことができた（馬場地区第4トレンチの土層図参照、23･24頁）。その他、『岡城城下家中図』中にも表現されている南側土塁中央に設けられている階段遺構や排水施設と考えられる石組溝、河畔に面して護岸のために設けられたと推定される石垣遺構なども検出されている。馬場地区で検出されたこれらの遺構も埋土保存されるため、発掘調査は最小限に止めている。また土塁遺構が存在する付近の下層には、比較的良好な縄文晩期包含層が存在しており、東側の一部で掘り下げを行なった。

中川久祐屋敷跡は、『中川史料集』に天保5年（1834）5月に中川雄三郎が河内谷御別邸へ引き移るという記事が見え、この時点で完成していたと思われる。屋敷跡の領域は馬場跡の西側と重複しており、久祐屋敷の建設に伴い河内谷馬場は廃絶した可能性が高い。屋敷地区南側では、馬場の土塁に新たに土を積み上げて土塁高を高くしている。調査区内では石垣遺構・土坑・溝などが検出され、出土遺物には久祐屋敷の存続期間と矛盾するものはない。これらの遺構も埋土保存の処置がなされている。

縄文時代晩期の遺物包含層は、すでに記したように、発掘調査区のほぼ全域に分布している。今回は近世の遺構が重複していない2地点で包含層の掘り下げを行なったほか、馬場地区で設定した第2トレンチ断面から無刻目突帯文深鉢の大型破片を採集している。

以上のように、今回の発掘調査では近世の御茶屋跡・馬場跡・屋敷跡の遺構に加え、縄文時代晩期の包含層が確認された。近世の遺構群はその残りが比較的良好であり、特に馬場跡の土塁遺構は竹田市内に残存するものとしては唯一のものである[5]。また今回の調査対象区は河川改修の工事対象区と対応するものであり、御茶屋跡・馬場跡・久祐屋敷跡のそれぞれの領域の一部を調査したに過ぎない。調査地以外の地点でも、周辺の状況から上記の遺構群の残存状況は良好なものと推定される。以上を鑑みて、大分県文化課では今回検出された遺構群の保存を工事主体者である竹田土木事務所に対して行ない、協議を重ねた。幸いにして、竹田土木事務所の理解と協力を得ることができ、工事計画を一部見直して、遺構群・包含層のすべてを当分の間地下に埋土保存することが決定した。従って、近世の遺構の一部や縄文時代の包含層については、その時期と性格をつかむための最小限の調査に留まっていることを付記しておきたい。

現地での発掘調査は、1994年２月から７月下旬の間に行なった。以下、発掘調査で設定したブロックごとに、発見された遺構・遺物の詳細を紹介したい。

註 (1) 竹田市教育委員会「岡城城下家中図」(『岡藩絵図』資料編所収)

(2) 10代藩主中川久貞の子供には、６人の男子と２人の女子があった。長男は中川悌之丞で、後の11代藩主中川久教となる。次男は中川久利(幼名幹之丞)、三男が中川久祐（通称雄三郎）である。長女は絢で、異母兄である11代藩主中川久教の室となる。次女は貴で、岡部内膳正藤原長和の室。四男・五男・六男に当たる中川榮之進・忠之助・孝之助はいずれも早世している。
北村清士校注『中川史料集』(新人物往来社　1969年)
株式会社大分放送大分歴史事典刊行本部『大分歴史事典』(1990年）参照。

(3) 『両郡古談』全（郷土史料第１巻　九犀書院　1934年）

(4) 北村清士校注『中川史料集』(前掲)

(5) 『岡城城下家中図』（天明７年＝1787作成）によると、岡藩内の馬場は河内谷馬場を含め、３箇所が知られている。他の２箇所は浦町と挟田の碧雲寺前面に存在したが、いずれも壊滅状態にあり、考古学的な調査でも土塁遺構の痕跡などを検出できていない。

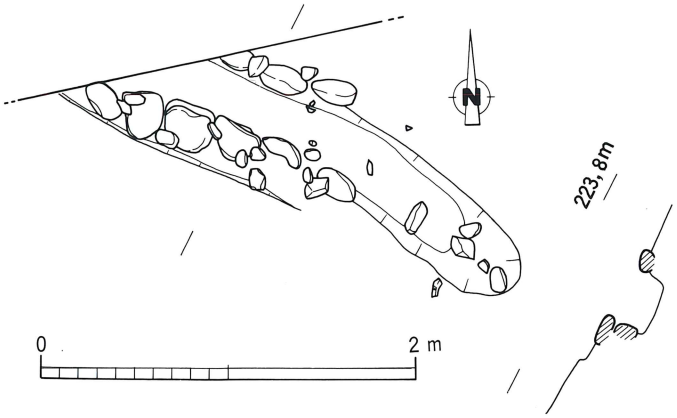
⑵ 河内谷御茶屋跡の調査

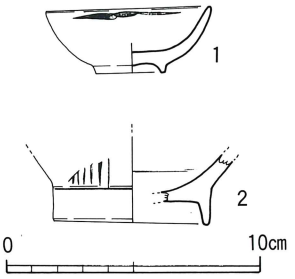
調査の概要　河内谷御茶屋跡は今回の発掘調査区の西側に位置するもので、以下の記述では、必要があれば便宜的に当該地点を「茶屋地区」と呼称する。前記の通り、河内谷御茶屋は元禄15年（1702）に５代藩主中川久通によって造営された施設である。発掘調査では上下２層の遺構面を確認し、検出した遺構（第６図）には溝（「ＳＤ」の略記号で表記）６、礎石列、階段遺構（「ＳＳ」の略記号で表記）１、土坑（「ＳＫ」の略記号で表記）６、その他の柱穴多数がある。下層の遺構面上からは、1690年～1740年代に比定できる肥前陶磁器や陶器瓶類および土師質土器など、元禄年間の御茶屋建設の記録と矛盾しない遺物群が出土している。調査途中で遺跡の埋土保存の方向が決まったため、下層遺構は調査区北東端部のＳＤ６とその周辺を掘り下げたのみに留まる。上層の遺構群からは、18世紀後半から19世紀代の遺物が出土しており、これらは河内谷御茶屋の存続期間を示唆している。以上の上・下層での遺構はいずれも埋め戻しの措置が取られ、地下に保存されている。また、茶屋地区における江戸時代の遺構面下の大部分で、縄文時代晩期の遺物包含層が認められた。従って、今回は近世の遺構が分布していない南東側でこの包含層を掘り下げ、縄文土器・石器など遺物の採集を行なっている。

今回の発掘調査区は、周辺の状況から本来の河内谷御茶屋の領域の南辺部に当たり、御茶屋の中心部は調査区外の北側に相当すると推定される。御茶屋中心部と推定される地点は現在畑や竹林となっており、当該地点の遺構の保存状態も比較的良好なものと推定される。将来的な目標としては、考古学的調査を含めた周辺地域の総合調査を行なった上で、今回埋土保存を施した遺構群とともに、史跡整備などの活用がなされることが期待されよう。

第６図　河内谷御茶屋跡遺構配置図（Ｓ＝１／250）

ドット（１～５）は下層遺構面出土遺物（第20図参照）の位置に対応。





第８図　河内谷御茶屋跡ＳＤ１
出土遺物（Ｓ＝１／３）

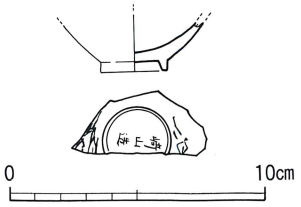
第７図　河内谷御茶屋跡ＳＤ１
（Ｓ＝１／40）

ＳＤ１（第７図）　茶屋地区西端部に位置する石組溝である。検出部分の長さ2.2m、深さ0.3mを測り、延長部はさらに調査区外に延びる。掘方は部分的に２段となり、その壁面には川原石を１段ないし２段重ねている。西側の延長部にはＳＤ２および階段遺構ＳＳ１が続き、その位置関係からＳＤ２に接続し、排水の機能を有していた可能性が考えられる。埋土中から肥前磁器染付紅皿や広東碗の底部が出土しており、19世紀前半以降の遺構である。

出土遺物（第８図）　１は肥前磁器染付紅皿で、18世紀後半以降の製品である。２は肥前染付磁器広東碗の底部で、製作年代は1780～1820年代に比定される。その他、ＳＤ１からは18世紀後半以降に製作された「山水土瓶」と俗称される関西系陶器の土瓶片が出土しているが、小破片であるため、図示していない。

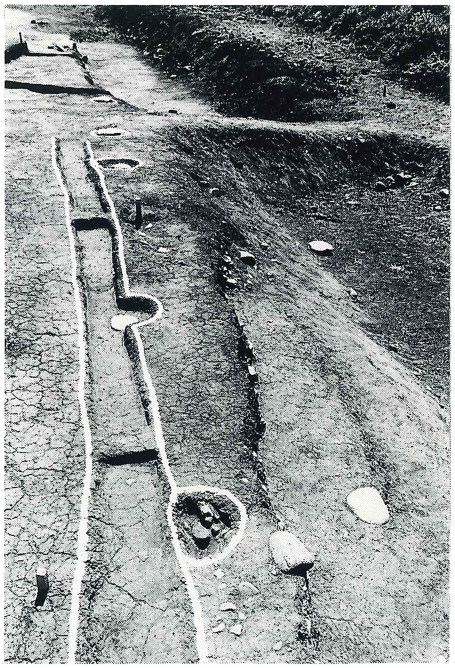
ＳＤ３・礎石列（第10図）　ＳＤ３はＬ字状に屈曲する素掘りの溝で、検出部分の南北辺は長さ約４ｍ、幅約0.9ｍ、深さ約12㎝、東西辺は長さ約10.5ｍ、幅約0.5ｍ、深さ約10㎝を測る。後述する礎石列を切って構築されている。埋土中より、幕末段階までに収まる遺物が出土している。礎石列は扁平な川原石で製作した礎石３個を使用したもので、礎石Ａ・Ｂ間は約２ｍ、礎石Ｂ・Ｃ間は約１ｍを測る。検出できなかったものもあるが、礎石を設置する掘方は約0.5ｍを測る。出土遺物は認められない。調査区の制約から、当該遺構の性格や時期は不詳である。

出土遺物　第９図はＳＤ３より出土した肥前系磁器染付碗の底部で、内底部に「崎山造」の銘款がみられる。19世紀前半から中頃の製品。その他、陶器の土瓶底部や擂鉢胴部片が出土している。

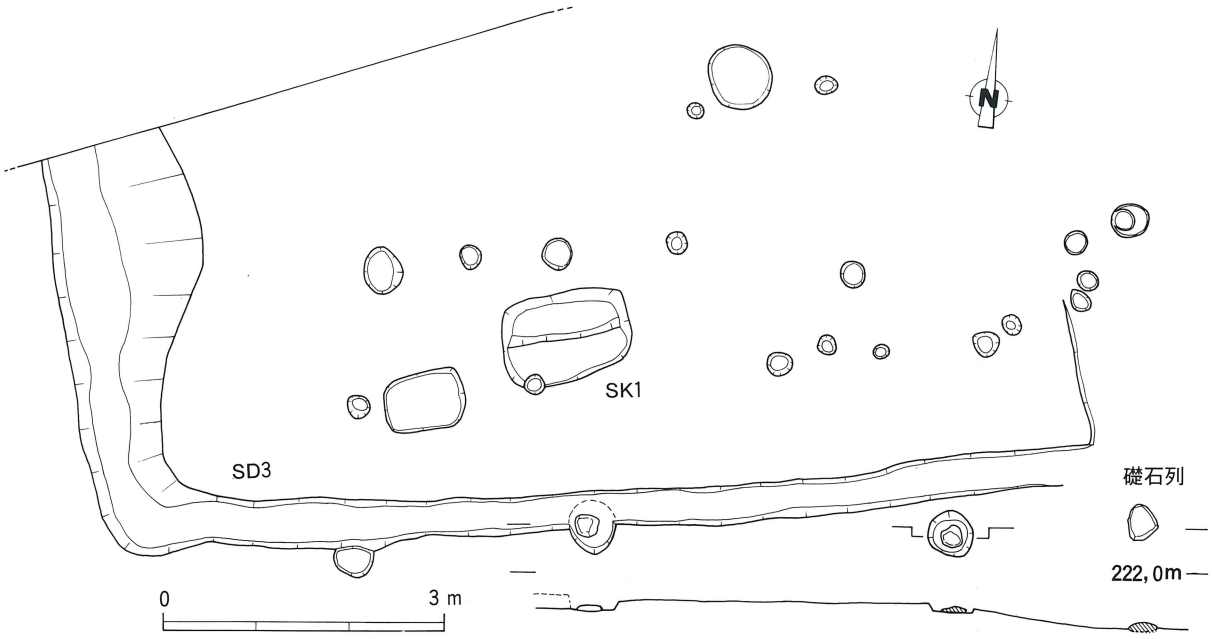


第９図　河内谷御茶屋跡
ＳＤ３出土遺物
（Ｓ＝１／３）

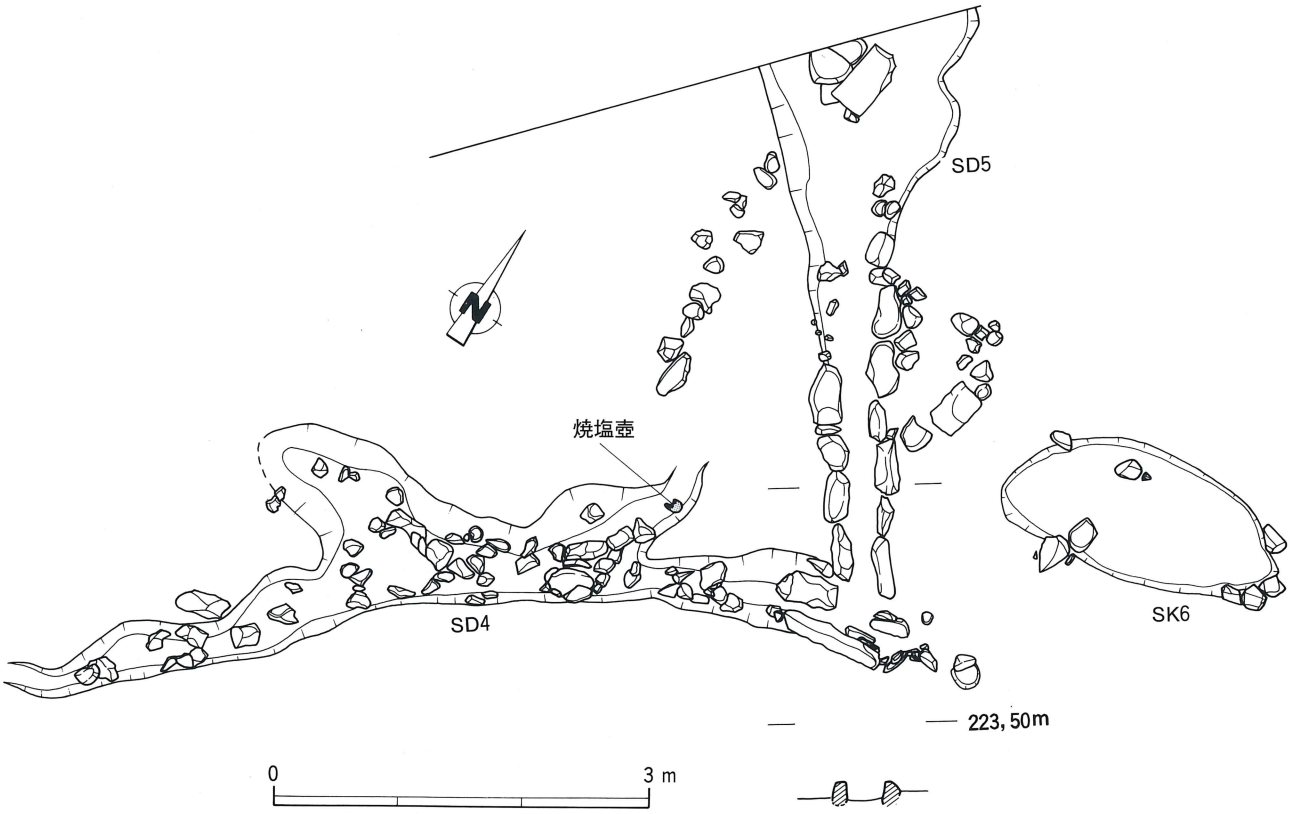
河内谷御茶屋跡礎石列（東から）



河内谷御茶屋跡礎石列（西から）



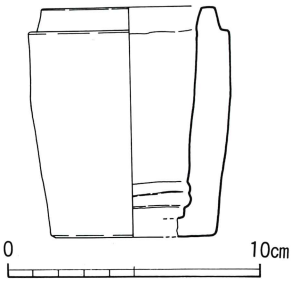
第10図　河内谷御茶屋跡ＳＤ３・礎石列（Ｓ＝１／80）



第11図　河内谷御茶屋跡ＳＤ４・ＳＤ５（Ｓ＝１／60）

ＳＤ４・ＳＤ５（第11図）　ＳＤ４は埋土中に拳大の礫を含む溝、ＳＤ５は石組溝で、両者は接続する。ＳＤ４は長さ約6.6m、幅約0.4m、深さ約10㎝、ＳＤ５は長さ約4.5m、幅約0.6m、深さ約15㎝を測る。ＳＤ５からの出土遺物は認められないが、ＳＤ４の埋土中からは焼塩壺が出土しており、18世紀後半代の遺構と推定される。両者が排水の機能を有すると推定されることやＳＤ５に隣接して埋土中に多量の焼土を含むＳＫ６が存在していることから、この付近が例えば台所的な機能を持つ場所であると推定することも可能である。

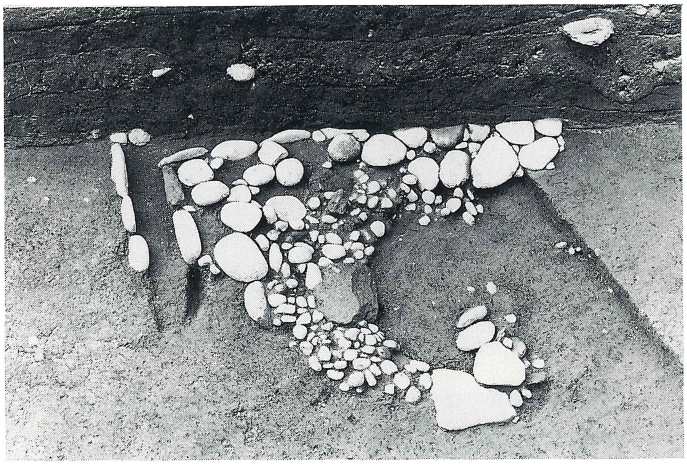
出土遺物　第12図はＳＤ４より出土した土師質土器焼塩壺で、板造りによって整形されている。全体の２分の１程度の破片で、底部は欠損している。残存部に刻印は認められない。18世紀代の遺物である。

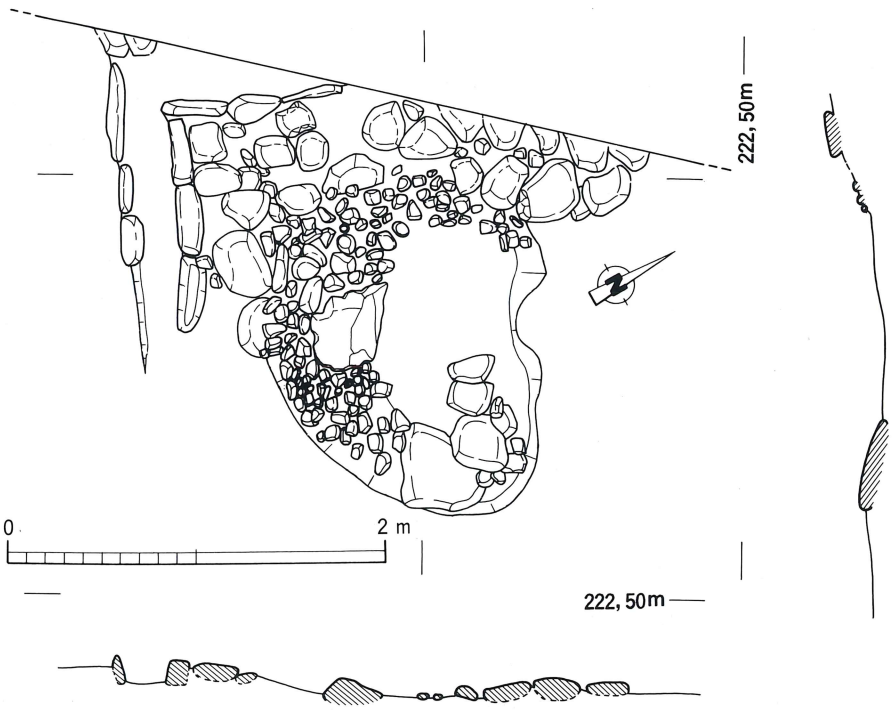


第12図　河内谷御茶屋跡ＳＤ４
出土遺物（Ｓ＝１／３）

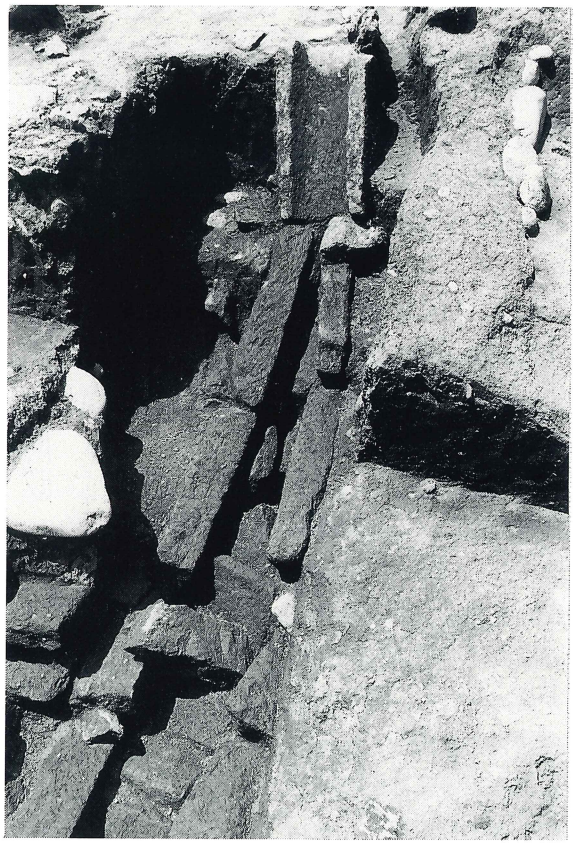
ＳＤ６（第13図）　茶屋地区北東端部に位置する遺構で、下層遺構に属する唯一のものである。円礫・小礫を配した土坑の縁辺に川原石を立てた石組溝を構築する。石組溝は長さ約1.5m、幅約0.4m、深さ約15cmを検出しており、中途でＬ字状に屈曲し、調査区外に延びる。調査区の制約により、その性格は不明であるが、遺構の形態から庭園・園池に関連するものである可能性が考えられる。出土遺物が認められず、詳細な年代は不詳であるが、下層遺構に属することから18世紀前半前後に位置づけられるものであろう。

ＳＤ２・階段遺構ＳＳ１（第14図）　ＳＤ２は石組の排水溝で、階段遺構ＳＳ１に接続する。平面形態は緩やかに弧を描いており、延長部分にはＳＤ１が存在している。また、北側は阿蘇溶結凝灰岩を主体とした角礫を２～３段に組んだ石組に接続しているが、これも排水施設と推定される。石組溝の部分は長さ約2.6m、幅約0.5m、深さ約15cmを測る。周辺から「臼杵丸山」の刻印を有する土師質土器火鉢の脚部（第15図）が出土しており、19世紀前半以降の遺構である。ＳＳ１は排水施設を有する階段遺構である。この階段遺構は岡城清水門より山道を下り、稲葉川畔より河内谷の施設に至るための遺構のひとつである。階段部分は直方体に加工した阿蘇溶結凝灰岩を使用している。本来５～６段分の階段を有していたと思われるが、３段分のみが残っていた。この階段部の下部に石組の排水施設が存在する。排水施設には少なくとも３回の改修が認められる。最も古い段階の溝は側面に使用されたと思われる円礫の石列３個を残すのみ（第14図中に青で着色したもの）で、規模や構造の詳


河内谷御茶屋跡SD6

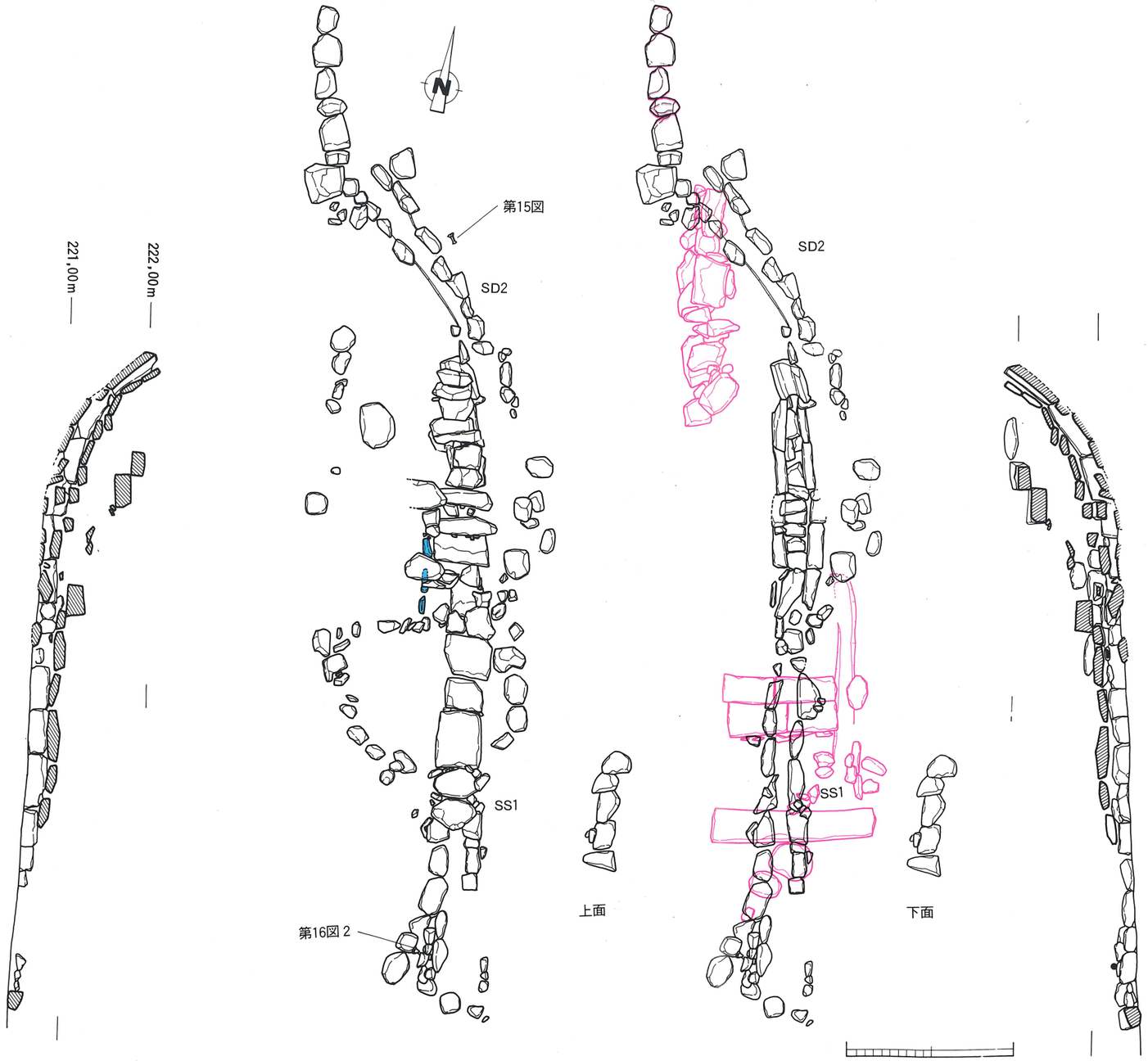


第13図　河内谷御茶屋跡ＳＤ６（Ｓ＝１／40）

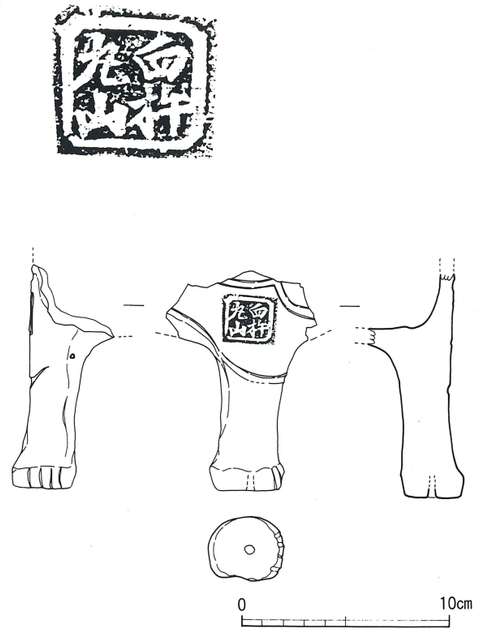


（左上）河内谷御茶屋跡階段遺構ＳＳ１検出状況。　（右上）階段部をはずした状況、排水溝を検出。

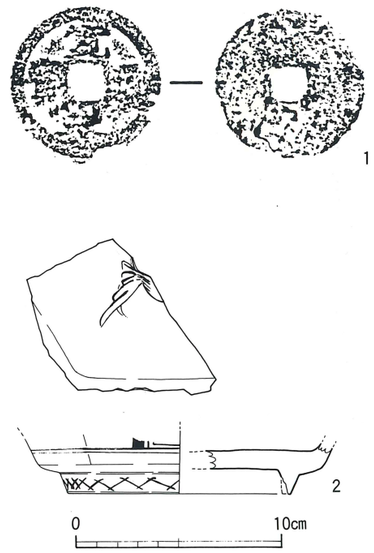
（左下）排水溝の蓋石をはずした状況。　（右下）排水溝細部。一部にＵ字形に加工した石材が使われている。



第14図　河内谷御茶屋跡ＳＤ２・階段遺構ＳＳ１（Ｓ＝１／60）

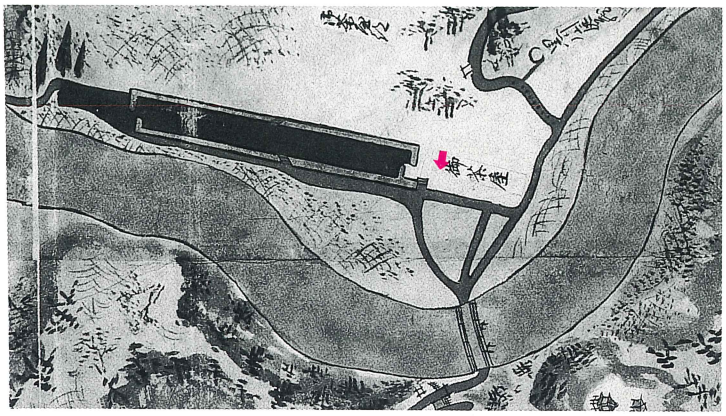


第15図　河内谷御茶屋跡ＳＤ２出土遺物
（Ｓ＝１／３、上段の刻印拓本は実大）



第16図　河内谷御茶屋跡ＳＳ１出土遺物
（１は実大、２はＳ＝１／３）

細は不明である。２回目の改修時も石組溝を構築したもので、構造的に最も手の込んだものである。石組溝の底面は排水の機能を果たすために角度を付けているが、溝の南端部から約５ｍの所までは緩傾斜で、それ以北の部分は急傾斜となる。急傾斜の部分の底面は漏水を防ぐため、長方形に加工した敷石を有するが、緩傾斜の部分にはそのような施設は認められない。北端部に使用されている底面の石は、阿蘇溶結凝灰岩を用いて断面形態「コ」の字状に加工している（16頁写真参照）。さらに石組溝上面には蓋石を設け、その上部に階段に使用した直方体の加工石を乗せる。石組溝の位置は、遺構検出時の階段の中心部から外れている。溝の南端部付近は攪乱を受けていると思われ、蓋石が失われているうえ、側面の石列にも乱れがみられる。この溝の南端部付近から、1820～1860年代に比定できる肥前磁器染付六角鉢（第16図２）の底部破片が出土している。最終段階の改修は、石組溝ＳＤ２の構築によって水の流れの方向を変え、階段下の石組施設に導水を行なわず、階段の最上段と２段目付近の東側側面にたれ流すようにするものである。このような不十分な改修となった原因には、おそらく階段下の石組溝が詰まり、使用に耐えなくなった状況が想定できるであろう。先程２回目の改修時に構築された石組溝が、階段の中心部から外れていることを指摘したが、最終段階の改修に際して水の流れの方向を確保するために、階段の石を西側に移動させた可能性が高い。この階段遺構ＳＳ１の構築開始年代は明らかではないが、出土遺物より、数度の改修を経た後、幕末段階まで存在した可能性が高いと考えられる。なお、ＳＳ１は天明７年（1787）に作成された『岡城城下家中図』の河内谷馬場・河内谷御茶屋の図に対比できる表現が認められ、絵図との対比が可能である（第17図）。

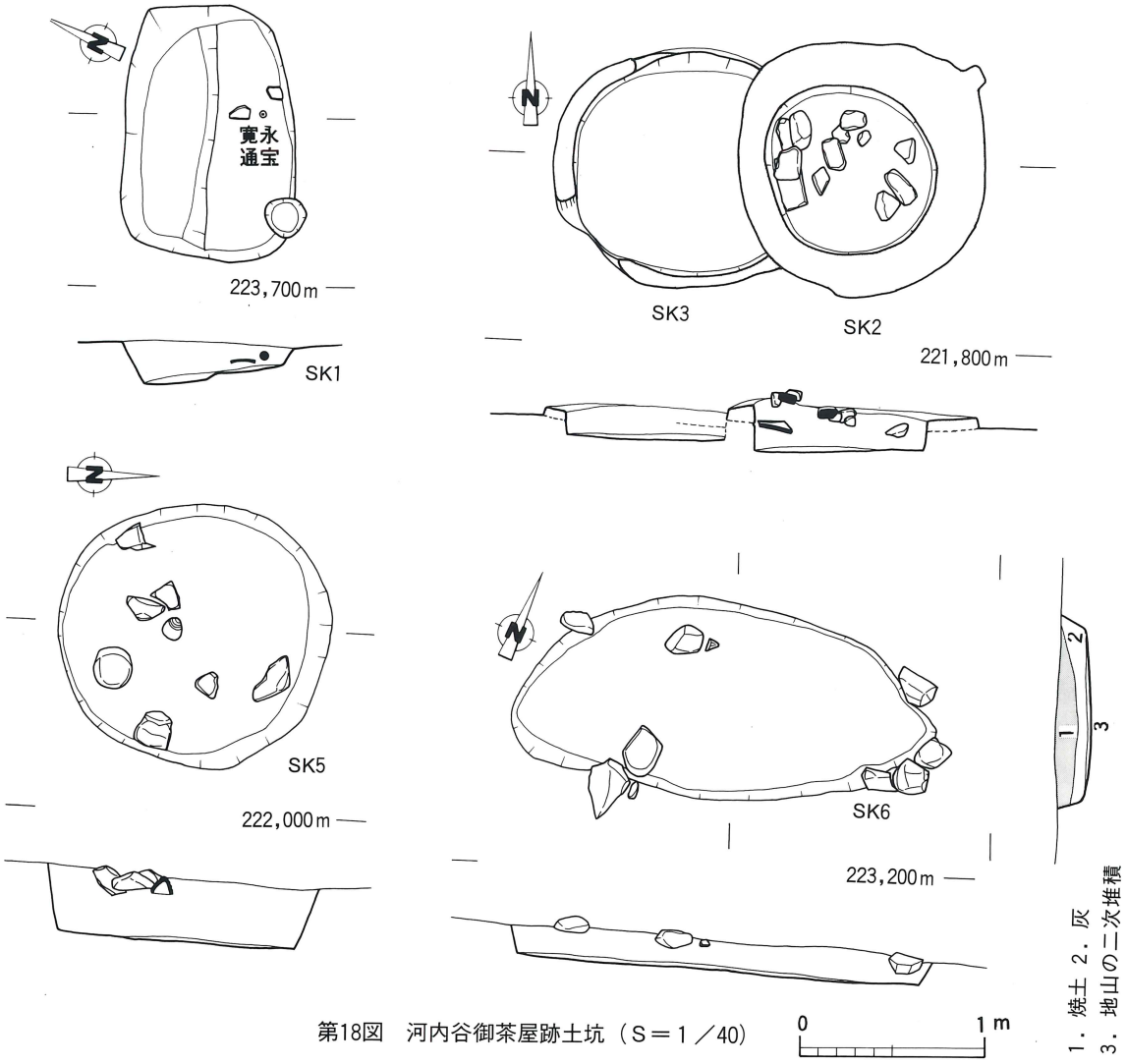


第17図　『岡城城下家中図』に見える階段遺構ＳＳ１

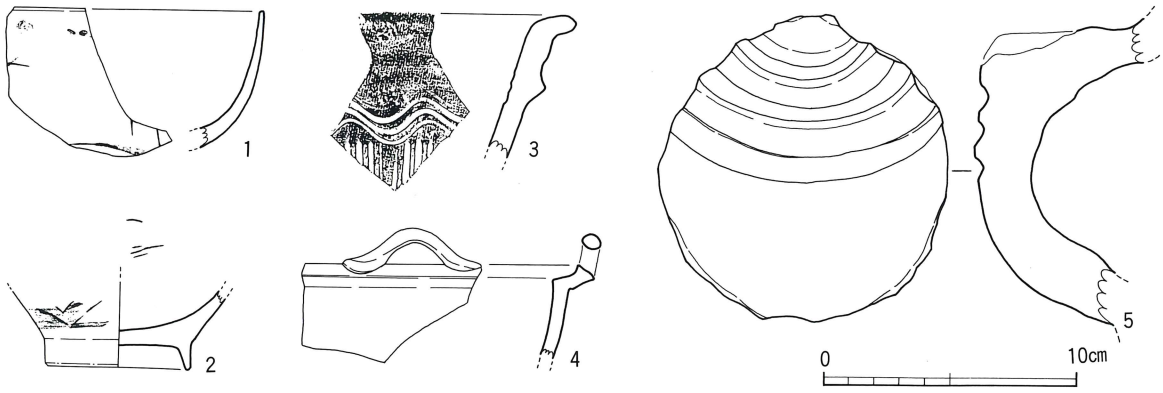
出土遺物（第15・16図）　第15図は、ＳＤ２から出土した土師質土器火鉢の脚部である。いわゆる獣脚の形態を呈し、底面には台などに固定するための小孔が設けられている。残存部外面の上部には「臼杵丸山」の刻印が認められ、豊後臼杵丸山で製作された在地産の土師質土器であることが判明した。丸山焼は大分県臼杵市仁王座の丸山に存在した陶器窯である。江戸時代は臼杵藩の領域で、岡藩とは隣藩となる。臼杵藩が幕末期に、延岡（宮崎県）より白瀬定吉・木村某らの陶工を招いて開窯し、陶器場と呼ばれた。臼杵藩海添お長屋の小倉丈右衛門が窯場を支配していたという。窯場の経営は廃藩後は留恵社（氏族授産会社）に任され、最後には陶工自身に委ねられた。廃窯は明治10年代前半代である。丸山焼は通称「茶碗焼」とも呼ばれ、皿・鉢（施白釉）・こね鉢・徳利・片口・水差・急須・六兵衛（煎薬用の大型急須）・半胴甕・火鉢・焜炉・火消壺等の雑器を製作しており、陶土は芝尾の山や原山で採取していたという[1]。丸山焼火鉢の現物が確認された意義は大きく、さらにこれが岡藩領内で出土したことは非常に興味深い。なお、この火鉢と同形式のものが竹田市向山手遺跡（岡藩中級武士の武家屋敷跡）でも複数個体が出土しており、さらに同遺跡では「ウスキ丸山」の刻印を有する行平鍋把手も確認されている（いずれも未報告）。図示した当該遺物は、19世紀中頃の製品である。

第16図は、階段遺構ＳＳ１から出土した遺物である。１は寛永通宝で、「古寛永」に分類されるものである。２は肥前磁器染付六角鉢の底部破片で、製作年代は1820～1860年代に比定される。

ＳＫ１～ＳＫ６（第18図）　ＳＫ１～ＳＫ６は茶屋地区で検出された土坑である。ＳＫ１は長軸約1.4ｍ、短軸約0.95ｍ、深さ約20㎝を測る。底面には段を有する。埋土中から寛永通宝と思われる銅銭が出土しているが銹出が著しく、図化不能である。その性格や詳細な構築年代も明らかでない。ＳＫ２・ＳＫ３は、いずれも周辺に三和土を巻いて構築した土坑である。ＳＫ２は平面形態が径約1.4ｍ円形を呈し、深さは約25㎝である。ＳＫ３は同じく平面形態が径約1.3ｍの円形を呈し、深さは約20㎝を測る。両者ともその性格は明らかではないが、便

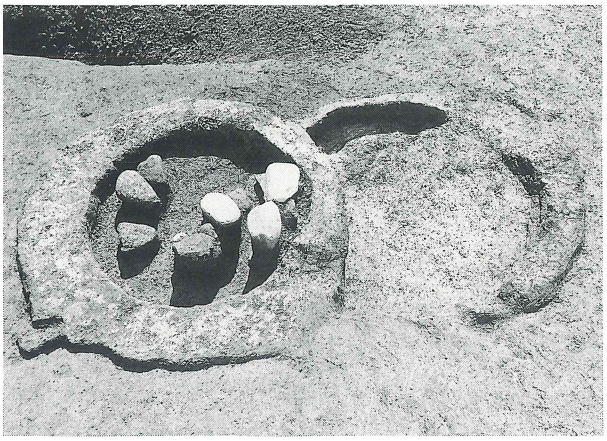


第18図　河内谷御茶屋跡土坑（S＝1／40）

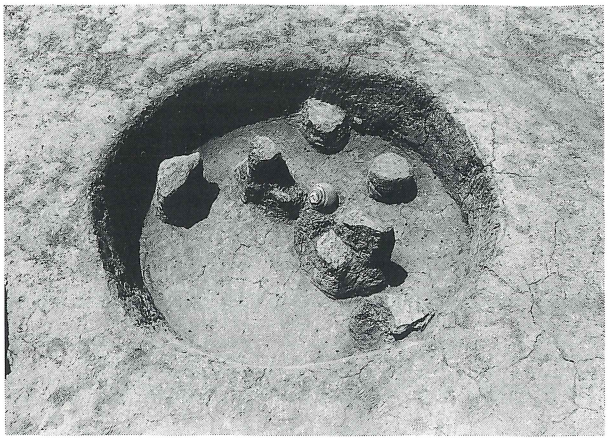


第19図　河内谷御茶屋跡土坑出土遺物（S＝1／3）（1・2、SK2　3・4、SK4　5、SK5）

所遺構である可能性が考えられる。ＳＫ３→ＳＫ２の順で切り合いがあり、出土遺物から両者が18世紀後半以降の構築であることがわかる。ＳＫ４としたものは、茶屋地区ＳＫ２・ＳＫ３の北側に位置する（ＳＫ４の位置は第６図参照）。掘方ラインを検出できなかったが、径約0.4mほどの範囲に炭化粒と磁器小片が分布していた。図示していないが、磁器片は18世紀代の所産である。ＳＫ５は平面形態円形の土坑で、径約1.4m、深さは約35cmを測る。埋土は地山に起因する固くしまった砂質土で、埋土上位より川原礫と鬼瓦の破片と思われる遺物が出土している。詳細な年代は不詳。ＳＫ６は長軸約2.2m、短軸約1.1m、深さ約15cmを測る平面形態楕円形の土坑である。



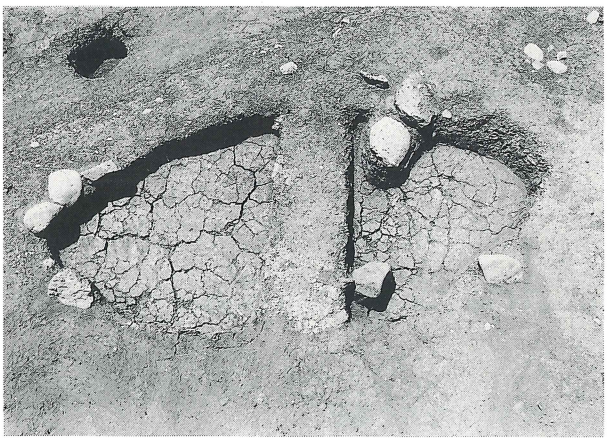
河内谷御茶屋跡　SK2・SK3



河内谷御茶屋跡　SK5

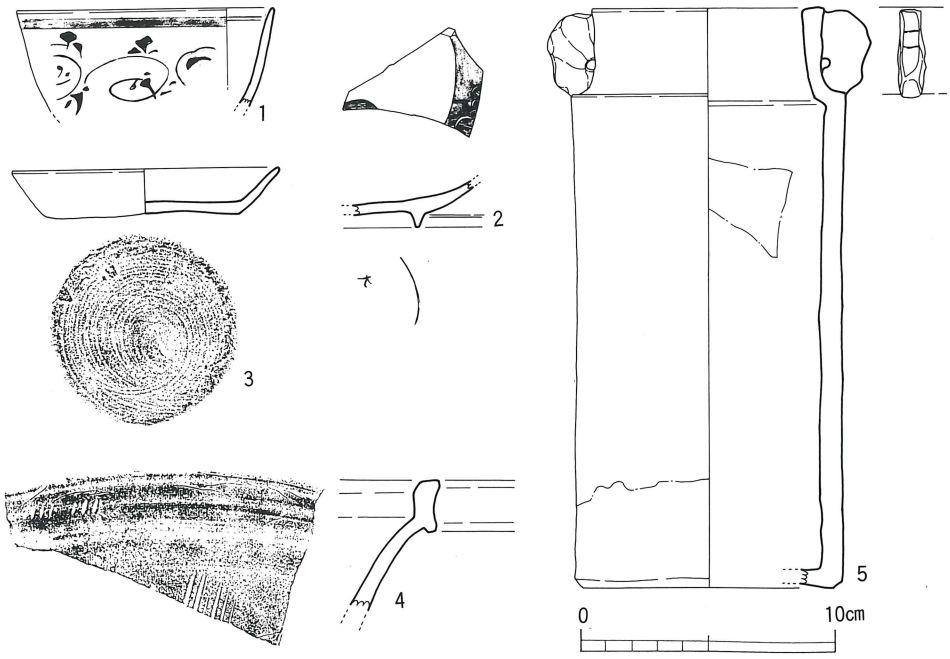
埋土は上層から、焼土・灰・地山の二次堆積土の３層に分かれる。また、東側の石列は意図的なものである可能性が高い。埋土中に焼土を多く含むことなどから、たとえばカマド基底部などの機能が想定できる可能性があるが、断定できない。出土遺物が認められず、これも詳細な年代は不明である。

土坑出土遺物（第19図）　１・２はＳＫ２埋土中からの出土遺物。１は肥前磁器染付碗で、くらわんか碗と通称されるものである。18世紀後半代の製品。２は肥前磁器染付広東碗底部で、1780～1820年代に比定される。３・４はＳＫ３からの出土遺物。３は陶器擂鉢で、４条を一単位とする擂目が認められる。最上部の擂目が波状文となることが特徴である。肥前系のものと思われるが、在地産である可能性も考えられる。18世紀後半以降の製品。４は外面に鉄釉を施す関西系陶器鍋で、18世紀後半以降の所産である。５はＳＫ５からの出土遺物で、宝珠を主文様とした鬼瓦の破片であろうか。製作年代は不詳である。



河内谷御茶屋跡　SK6

下層遺構面出土遺物（第20図）　１～５は御茶屋地区下層遺構面から出土した遺物である（出土地点について



第20図　河内谷御茶屋跡下層遺構面出土遺物（S＝１／３）

は、第６図参照)。１は肥前磁器染付端反碗で、1820～1860年代の製品。他の出土遺物に比べて時期が新しく、混入である可能性がある。２は肥前磁器染付皿の底部で、内底部に「大明年製」銘の一部がみられる。内面文様には墨弾き技法がみられる。18世紀前半代。３は土師質土器の小皿で、底部に右回転の糸切り痕が認められる。内面にススが付着しており、灯明皿として使用されている。４は陶器擂鉢の口縁部で、産地不詳。17世紀代の製品。５は陶器瓶類で、花生として使用された可能性が考えられる。胎土は茶褐色を呈し、外面の釉は現状では黄褐色を呈する。底部付近は露胎となる。産地は不明（在地産か？）であるが、17世紀代の製品であろう。

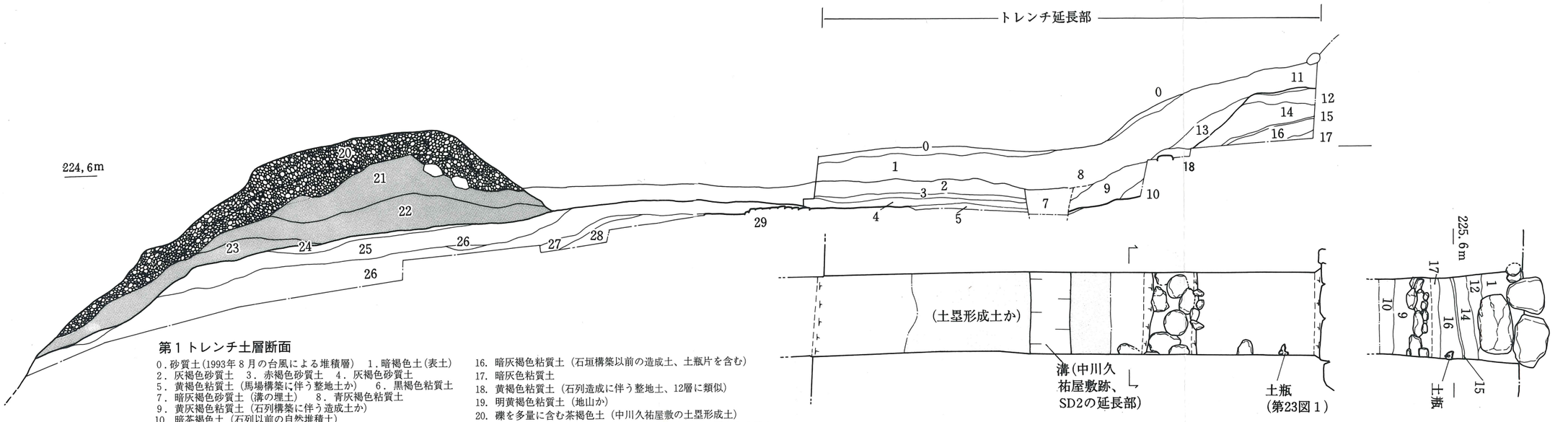
小結　河内谷御茶屋跡と推定される遺構群とその出土遺物を、前記で紹介した。河内谷御茶屋は５代藩主中川久通によって元禄15年（1702）に造営された施設で、今回の発掘調査で上下２層の遺構面が確認された。このうち下層遺構面の出土遺物の大半は18世紀前半代までで収まり、久通の御茶屋建設の記録と矛盾するものではない。上層遺構からの出土遺物は18世紀後半から19世紀代のものがあり、御茶屋の施設の大部分が幕末段階まで存続したことを想定させる。すでに記した通り、大胆に推測すれば、焼塩壺を出土したＳＤ４や埋土に焼土を多量に含むＳＫ６などは火処を有する台所的な遺構であり、周辺に三和土を巻き付ける土坑ＳＫ２・３は便所遺構である可能性が考えられるが、調査区の制約もあり、これらの遺構の性格に関して最終的な判断を下すには至っていない。ＳＳ１は排水施設を有する階段遺構で、天明７年（1787）に作成された『岡城城下家中図』の河内谷馬場・河内谷御茶屋の図に対比できる表現が認められ、絵図との対比が可能な遺構である。発掘調査では、幕末までに少なくとも３回の改修が認められている。出土遺物として注目されるものには、ＳＤ２の周辺から出土した「臼杵丸山」の刻印を有する土師質土器火鉢（第15図）がある。在地産の日常雑器である土師質土器の形態と流通を探るうえでの貴重な資料となるであろう。

註　(1) 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『図録　やきもの―豊のくらしと文化―』(1990年)

⑶　河内谷馬場跡の調査

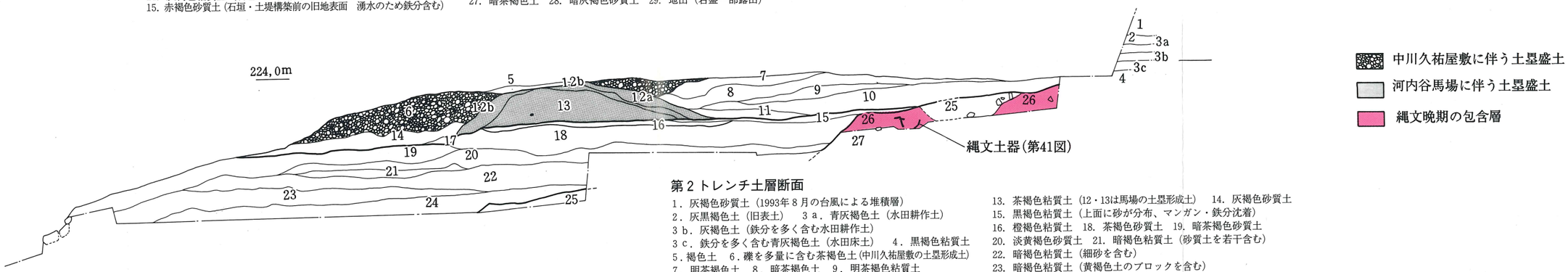
調査の概要　河内谷馬場跡は今回の発掘調査区の中央部に位置するもので、以下の記述では、必要があれば、便宜的に当該地点を「馬場地区」と呼称する。前記の通り、河内谷馬場は天明７年（1787）に作成された『岡城城下家中図』中に土塁で囲まれた遺構が表現されており、また実際に発掘調査以前から南側の土塁の一部が残存していた。今回の調査区の中央部から西側が河内谷馬場跡に対応するが、後に記すように西側は19世紀前半代に造営されたと推定される中川久祐屋敷の遺構の構築により、土塁などが消失している部分が認められる。従って、調査区中央部のみに馬場の施設が残存していることになる。現地に残存する馬場の土塁遺構は南側の一部のみであったが、今回のトレンチ調査で北側土塁基底部の痕跡を確認することができた。出入口(虎口)部を有する西側・東側土塁は、いずれも完全に消失している。南側土塁の一部では２段階に渡る盛土作業の工程が確認され、各々が馬場と久祐屋敷の構築に対応するものと推定された。そのほか、排水施設と推定される石組溝や川原礫で構築した階段遺構なども検出している。さらに、残存する土塁遺構の南側には稲葉川の護岸保護のために設けたと思われる石垣遺構（「ＳＶ」の略記号で表記）が存在しており、これについても本項目で取り上げる。また、馬場の遺構面の下層に縄文時代晩期の遺物包含層が認められる地点があり、第２トレンチ断面からは無刻目突帯文深鉢の大型破片を採取したのに加え、馬場地区東側で包含層の掘り下げを行なっている。

河内谷馬場の構築時期を直接に示す史料はなく、考古学的にも検討に耐える資料を得ることはできなかったが、御茶屋が建設された元禄15年（1702）前後には存在していた可能性が高く、さらに中川雄三郎（久祐）が河内谷別邸に引き移る天保５年（1834）には廃絶していた可能性が高いと考えられる。今回検出された遺構は埋土保存の処置が取られたため、土塁の断ち割り調査や一部の遺構の掘り下げを最小限に留めた部分がある。以下、調査の詳細と発見された遺構・遺物を紹介したい。



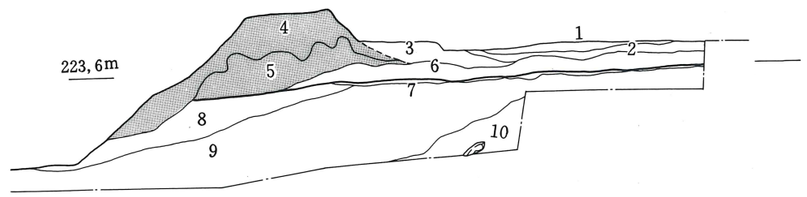
第1トレンチ土層断面

0.砂質土(1993年8月の台風による堆積層)　1.暗褐色土(表土)
2.灰褐色砂質土　3.赤褐色砂質土　4.灰褐色砂質土
5.黄褐色粘質土(馬場構築に伴う整地土か)　6.黒褐色粘質土
7.暗灰褐色砂質土(溝の埋土)　8.青灰褐色粘質土
9.黄灰褐色粘質土(石列構築に伴う造成土か)
10.暗茶褐色土(石列以前の自然堆積土)
11.暗灰褐色土(土堤部分の造成土)
12.黄褐色粘質土(石垣造成に伴う整地土)
13.暗灰色粘質土(流入土)
14.灰褐色粘質土(石垣・土堤構築に伴う造成土)
15.赤褐色砂質土(石垣・土堤構築前の旧地表面　湧水のため鉄分含む)
16.暗灰褐色粘質土(石垣構築以前の造成土、土瓶片を含む)
17.暗灰色粘質土
18.黄褐色粘質土(石列造成に伴う整地土、12層に類似)
19.明黄褐色粘質土(地山か)
20.礫を多量に含む茶褐色土(中川久祐屋敷の土墨形成土)
21.黄褐色土　22.灰褐色土　23.暗灰褐色土　24.灰白色砂質土
25.暗灰褐色土　26.淡黄褐色土
26'.淡黄褐色土(砂質土のブロックを含む)
27.暗茶褐色土　28.暗灰褐色砂質土　29.地山(岩盤一部露出)



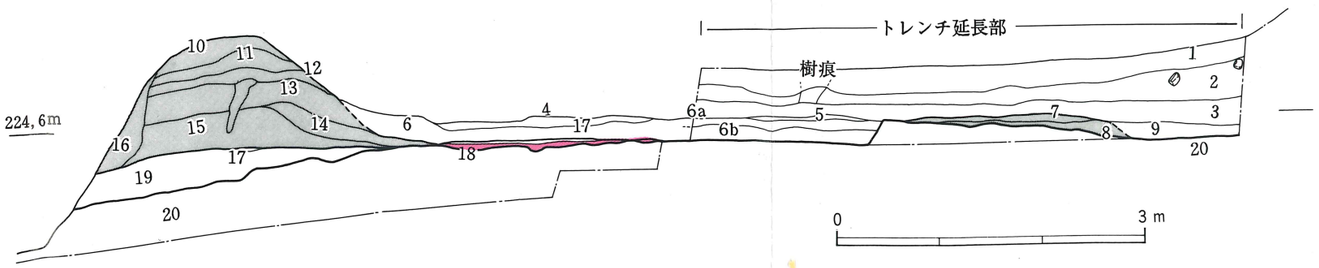
第2トレンチ土層断面

1.灰褐色砂質土(1993年8月の台風による堆積層)
2.灰黒褐色土(旧表土)　3a.青灰褐色土(水田耕作土)
3b.灰褐色土(鉄分を多く含む水田耕作土)
3c.鉄分を多く含む青灰褐色土(水田床土)　4.黒褐色粘質土
5.褐色土　6.礫を多量に含む茶褐色土(中川久祐屋敷の土墨形成土)
7.明茶褐色土　8.暗茶褐色土　9.明茶褐色粘質土
10.黒褐色粘質土　11.淡黄褐色土
12a.明黄褐色土　12b.茶褐色砂質土
13.茶褐色粘質土(12・13は馬場の土墨形成土)　14.灰褐色砂質土
15.黒褐色粘質土(上面に砂が分布、マンガン・鉄分沈着)
16.橙褐色粘質土　18.茶褐色砂質土　19.暗茶褐色砂質土
20.淡黄褐色砂質土　21.暗褐色粘質土(砂質土を若干含む)
22.暗褐色粘質土(細砂を含む)
23.暗褐色粘質土(黄褐色土のブロックを含む)
24.黒褐色粘質土　25.青灰色粘質土(遺構埋土の可能性大)
26.茶褐色土(縄文晩期の包含層)　27.茶褐色粘質土(地山)



第3トレンチ土層断面

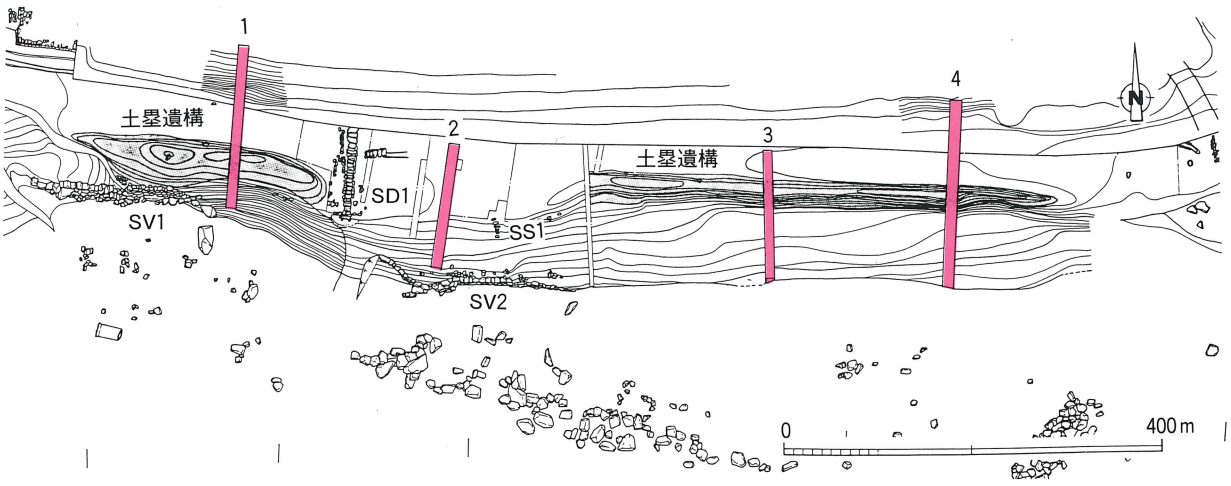
1.橙褐色土(馬場廃絶後の水田層)　2.黒褐色土
3.茶褐色土　4.灰茶褐色土
5.濁茶褐色土(4・5は馬場土墨の形成土)　6.暗茶褐色土
7.橙褐色砂質土　8.暗褐色土　9.暗茶褐色粘質土
10.茶褐色粘質土(湧水のため粘性が強い。)
※第3トレンチでは縄文晩期の遺物包含層に対応する層は認められない。



第4トレンチ土層断面

1.砂質土(1993年8月の台風による堆積層)
2.暗褐色土(近年の畑の耕作土)
3.暗赤褐色砂質土(鉄分含む。旧水田耕作土か)
4.赤褐色砂質土(鉄分含む。旧水田耕作土か)
5.赤褐色砂質土(旧水田床土か)　6a.暗褐色粘質土
6b.濁暗褐色粘質土(6a・6bは馬場廃絶以降の造成土)
7.暗褐色粘質土(馬場土墨形成土の残存)
8.暗黄褐色砂質土(地山の二次堆積層か。馬場土墨形成土の残存)
9.青灰褐色粘質土(水分による変質。還元化している)
10.茶褐色土　11.明茶褐色土
12.茶褐色土　13.暗茶褐色土　14.茶褐色土　15.黄茶褐色土
16.土墨表土(木の根等で表面風化)(10～16は馬場土墨形成土)
17.灰褐色砂質土(馬場形成以前の自然堆積層、上面カットの可能性あり)
18.暗黄褐色砂質土(縄文晩期包含層に対応。土器は出土していない)
19.灰褐色土(自然堆積層)　20.黄褐色砂質土(地山)

第21図　河内谷馬場跡土墨断ち割り調査トレンチ断面図(S＝1／60)



第22図　河内谷馬場跡遺構配置図（S＝1／800、赤は土塁断ち割りトレンチ）

土塁遺構断ち割り調査（第21図）　土塁遺構は馬場地区西部で長さ約27mが、東部で約50mが残存している。両者は現状では途切れているが、本来は『岡城城下家中図』にみえるように一直線上に繋がっており、馬場の南側土塁の一部を形成していたものと推定される。土塁遺構の断ち割り調査は、4箇所のトレンチを設定して行なった（第22図）。第1トレンチは西部の土塁上、第3・第4トレンチは東部の土塁上、第2トレンチは土塁が消失している地区に位置している。また、第1・第4トレンチでは現状で消失している馬場の北側土塁の痕跡を探るために、トレンチを延長している。

第1トレンチでは2段階にわたる土塁の積み上げ工程がみられる。第1段階の土塁形成土（21～23層）には均質な性状の土、第2段階の土塁形成土（20層）には川原礫を多量に含む茶褐色土が使用され、両者は明瞭な整合面をなす。第2段階の土塁形成土が認められる地区は第1・第2トレンチのみであり、これは後述する中川久祐屋敷跡の領域と重複する。従って、土塁形成土中からは遺物が検出されなかったものの、第1段階の土塁は河内谷馬場に伴うもの、第2段階の土塁は中川久祐屋敷跡に伴うものと推定される。すなわち、19世紀前半代以降の中川久祐屋敷の造営時に、すでに廃絶していた馬場の土塁を利用して、土塁高をかさ上げしたものと思われる。第1段階の土塁形成土の直下には灰白色砂質土（24層）が認められる。これに対応する層は、すべてのトレンチの第1土塁形成土直下でみられる。当該土層は土塁形成に伴って意図的に敷かれたも

河内谷馬場跡第1トレンチ延長部

第1トレンチ断面土瓶出土状況

のか、あるいは洪水・大水等の自然営為に伴う堆積層かどうかの判断はできていない。24層以下は自然堆積層である。第１トレンチ延長部では馬場の北側土塁と推定される土層と中川久祐屋敷造営時の整地土層が確認された。５層の黄褐色粘質土はその性状と位置から、馬場の土塁形成土（基底部か？）と推定された。以上より、馬場の土塁の内法幅は約4.7ｍを測る。５層の上位には２～４層が堆積しており、２層上面は後述する（37頁）屋敷地区ＳＤ２の延長部の遺構検出面となっている。７層（暗灰褐色砂質土）は、屋敷地区ＳＤ２の遺構埋土である。トレンチ延長部の平面・断面では中川久祐屋敷に伴う土堤や石垣、石列などの一部を検出しており、８・９・11～14層はそれに関連する整地層である。15層（赤褐色砂質土）は鉄分を多く含み、上記の整地層形成以前の地表面と推定される。当該地点は水分の湧出が認められ、整地層の形成下に鉄分が沈着することとなったのであろう。15層の下位は中川久祐屋敷以前の整地層であると推定されるが、16層（暗灰褐色粘質土）から18世紀後半以降に比定される関西系陶器土瓶（第23図１）が出土している。なお、第１トレンチでは縄文晩期の遺物包含層は確認されていない。

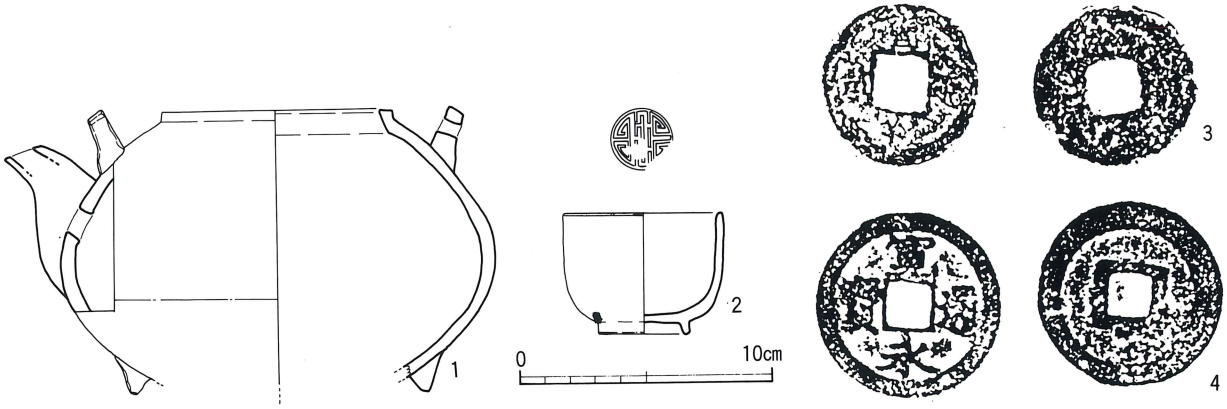
第２トレンチを設定した地区では、現状では土塁遺構が認められていなかったが、トレンチ断面で２段階にわたる土塁形成の工程に相当する土層が確認された。すなわち、馬場に伴う第１段階土塁形成土（12・13層）、中川久祐屋敷に伴う第２段階土塁形成土（６層）である。また、15層（黒褐色粘質土）の上面には第１トレンチ24層（灰白色砂質土）に対応する砂質土がわずかに認められる。15層以下は自然堆積層で、18層（茶褐色砂質土）が堆積する部分の北側には自然の落ち込みが存在しており、地山と思われる27層（茶褐色粘質土）の上位に縄文晩期の遺物包含層である26層（茶褐色土）が乗っている。また、26層中に切り込んで堆積している25層（青灰褐色粘質土）は、平面的な分布範囲を確認できていないが、遺構埋土である可能性が高い。

河内谷馬場跡第４トレンチ断ち割り状況

第３トレンチでは馬場に伴う土塁形成土（４～５層）のみを確認している。７層（橙褐色砂質土）は土塁下に分布する砂質土である。７層以下は自然堆積層で、この地点には明瞭な縄文時代晩期の遺物包含層が確認されていない。

第４トレンチでも、馬場に伴う土塁形成土（10～16層）と土塁下の砂質土（17層）を確認している。また、トレンチ延長部では馬場北側土塁基底部の痕跡を明瞭に検出することができた。北側土塁基底部は地山である黄褐色粘質土（20層）を削り出して形成しており、その上に７～８層（暗褐色粘質土・暗黄褐色砂質土）を積み上げている。以上の北側土塁形成土を覆う形で堆積する３層中からは、細片ではあるが、幕末から明治時代前半代に製作された磁器片が少量出土している。土塁で囲まれた馬場の内法幅は約4.6ｍである。また、18層（暗黄褐色砂質土）は縄文晩期遺物包含層に相当するものであるが、第４トレンチ内では縄文時代の遺物は出土していない。

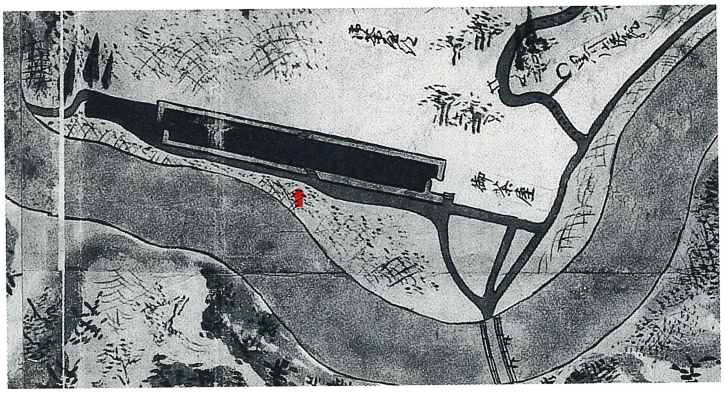
第４トレンチ延長部北側土塁残存部



第23図　トレンチおよび土塁周辺出土遺物（１・２はＳ＝１／３、３・４は実大）

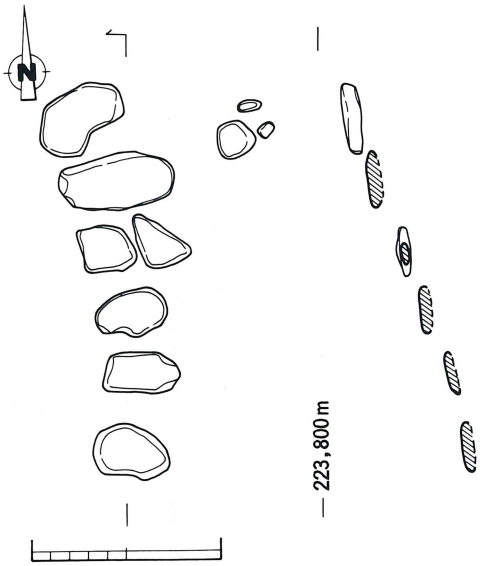
トレンチおよび土塁周辺出土遺物（第23図）　１は第１トレンチから出土した関西系陶器の土瓶である。口縁部内外面と胴部外面には鉄釉を施す。製作年代は18世紀後半以降に比定される。２は第４トレンチ３層から出土した瀬戸美濃白磁碗である。見込みには「壽」字を図案化したスタンプが押されている。1855年以降の製品である。３は寛永通宝の鉄銭で、土塁および周辺表土中から出土している。４は寛永通宝の銅銭で、第２トレンチ内から出土した。字体の特徴から、「古寛永」と分類されるものに属する。

階段遺構ＳＳ１（第25図）　馬場地区のほぼ中央部に位置する階段遺構で、７個の川原石を使用して６段が形成されている。茶屋地区で検出された階段遺構（第14図参照）と比較すると、簡便なものである印象は拭えないが、『岡城城下家中図』中の馬場南側土塁中央部に位置する階段の表現に対比される可能性が考えられる（第24図）。検出された階段の最上段と最下段の比高差は約75㎝である。周辺からの出土遺物は認められなかった。



第24図　『岡城城下家中図』に見える階段遺構ＳＳ１

河内谷馬場跡階段遺構ＳＳ１



第25図　河内谷馬場跡階段遺構ＳＳ１（Ｓ＝１／40）

SD１（第26図）　馬場地区東部に残存する土塁遺構の西側から検出された堅固な構造をもつ石組溝である。当初、縄文時代晩期遺物の出土を予測して当該地点を掘り下げたが、予測に反して当該遺構が検出された。石組溝に使用されている大型の石材の大部分は溶結凝灰岩である。石組み溝は調査区を横断する形で検出されており、検出部分の長さは約9.2m、幅は約0.6mである。溝は２段の石組で造られており、底面から蓋石下面までの高さは約0.6mである。上面には蓋石をもち、蓋石の一部には石材加工のための矢穴を有するもの（第26図中のスクリーントーンをはったもの）が認められる。南端部には幅、高さとも約0.6mを測る開口部が存在する。開口部付近には頭大の石を階段状に並べている。ＳＤ１の機能は排水溝と思われ、流水の方向は北から南である。なお、遺跡周辺が埋土保存されることが決定していたため、溝内部は完掘しておらず、検出部中央の蓋石を５枚をめくり、内部の石組の構造を確認したに留まる。また、当該遺構の東側に素掘の溝を伴う石組が検出されたが、これも現状での確認に留めている。ＳＤ１の周辺およびその内部からの出土遺物は認められず、構築時期は不詳である。ただ、当該遺構は馬場地区西部に残存する土塁遺構が途切れる地点に位置しており、土塁遺構を切って構築された可能性が考えられる。この想定が正しいとすると、当該遺構は後述する中川久祐屋敷に伴う排水溝と考えることが妥当と思われ、その構築時期は19世紀前半代に比定される可能性が高い。

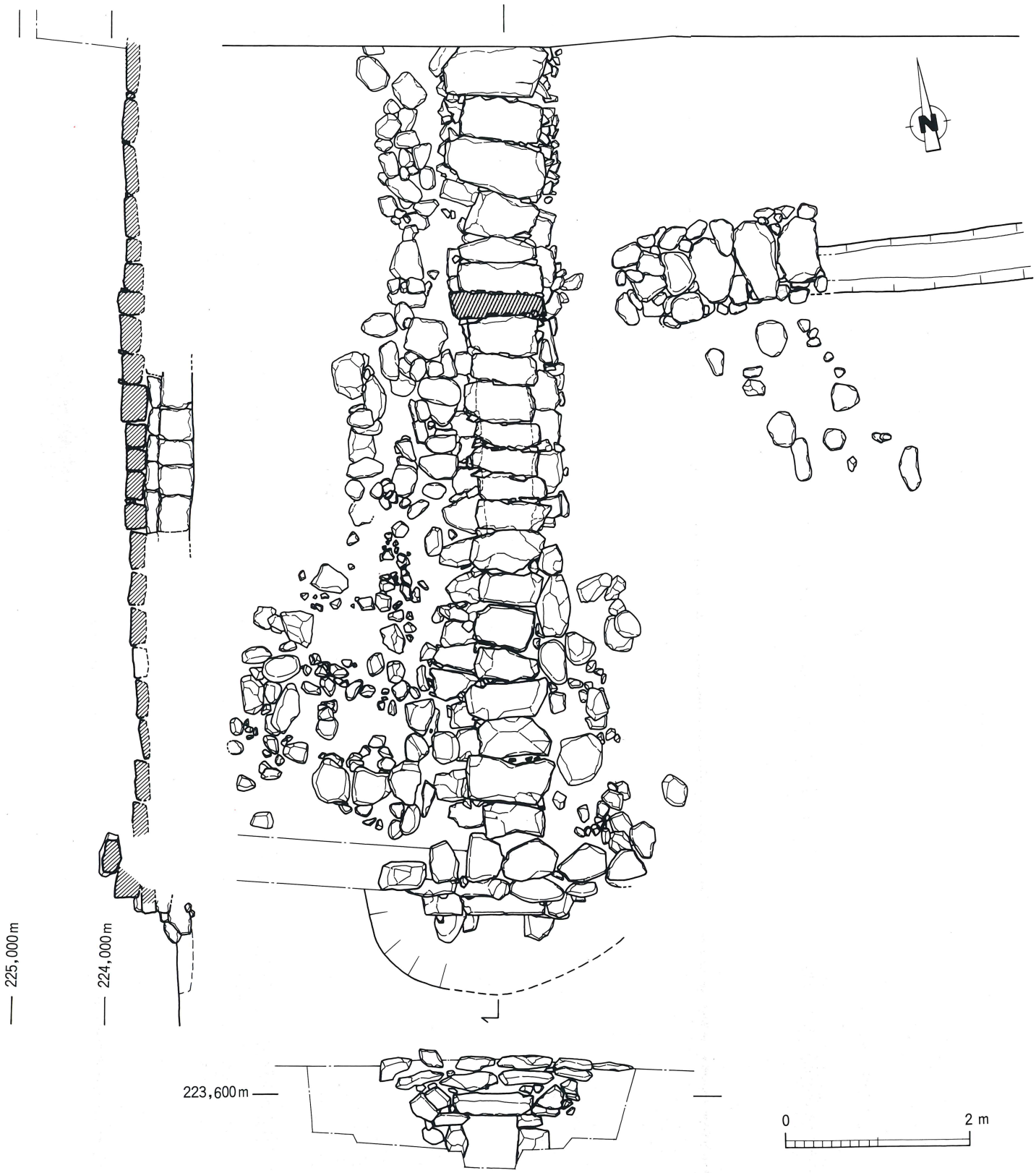
SD1 近景（北から）

SD1 全景（西から）

矢穴を有する蓋石

SD1 開口部（排水口）

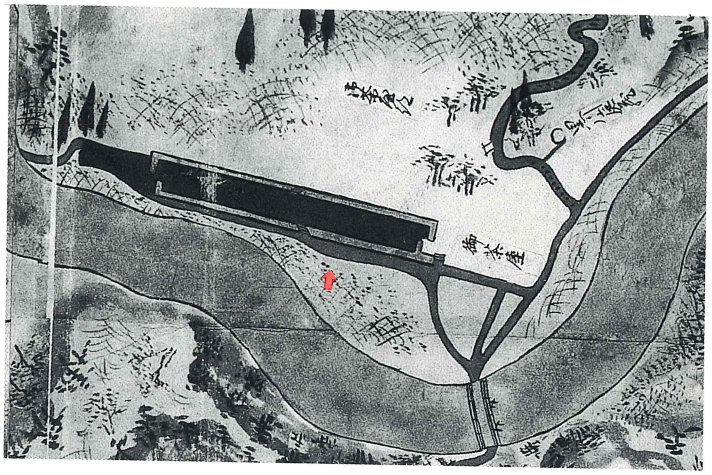
内部の石組の状況



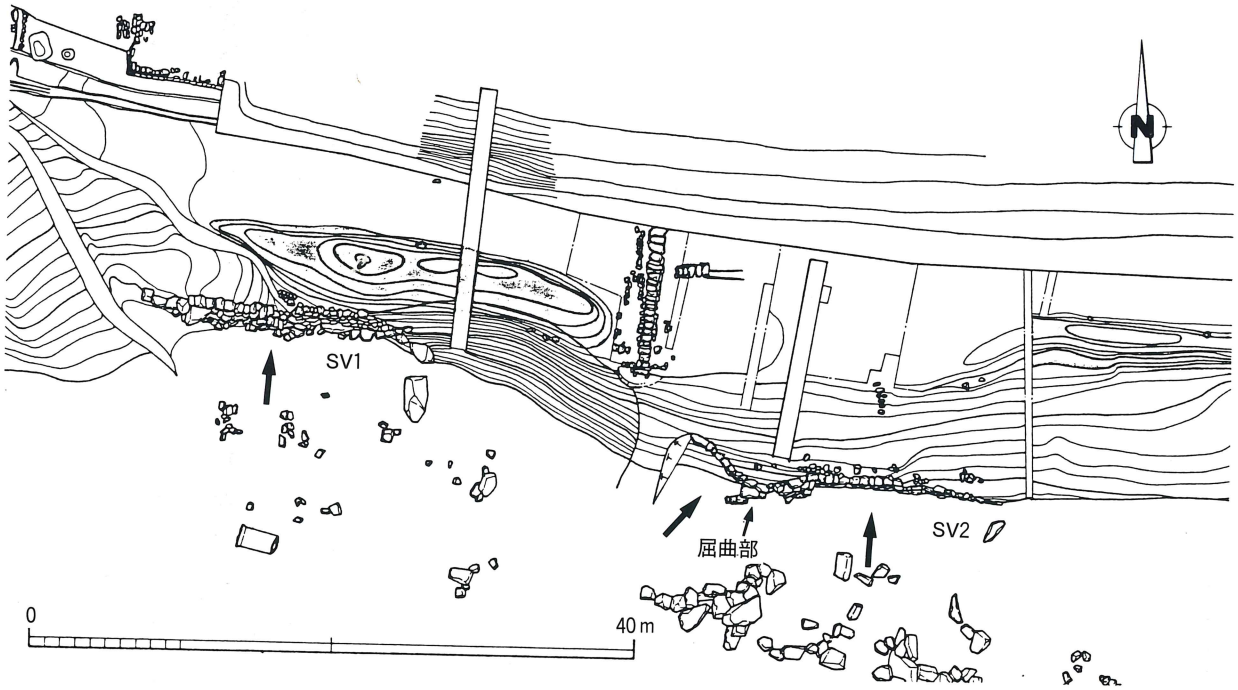
第26図　河内谷馬場跡ＳＤ１（Ｓ＝１／60）
スクリーントーンは矢穴を有する蓋石。

石垣遺構SV1・SV2（第29図）

ＳＶ１・ＳＶ２は馬場地区に存在する石垣遺構である。ＳＶ１は西側の土塁遺構の南に位置する。石垣の高さは最大高で約３ｍ、長さは約18ｍを測る。石材の大半は安山岩が使用されており、最大部では８段程度が積まれている。ＳＶ２はＳＤ２の南西および階段遺構ＳＳ１の南に位置しており、最大高で約2.2ｍ、長さは約17ｍを測る。石材の大半はやはり安山岩が使用されており、最大部では４段程度が積まれている。中途部分で屈曲部をもち、この屈曲部は『岡藩城下家中図』の馬場の土塁南側に見える道の屈曲部と対応する可能性がある（第27図）。ただし、そのように考えた場合、先に指摘した馬場地区階段遺構ＳＳ１との位置関係が狂うことになり、絵図と



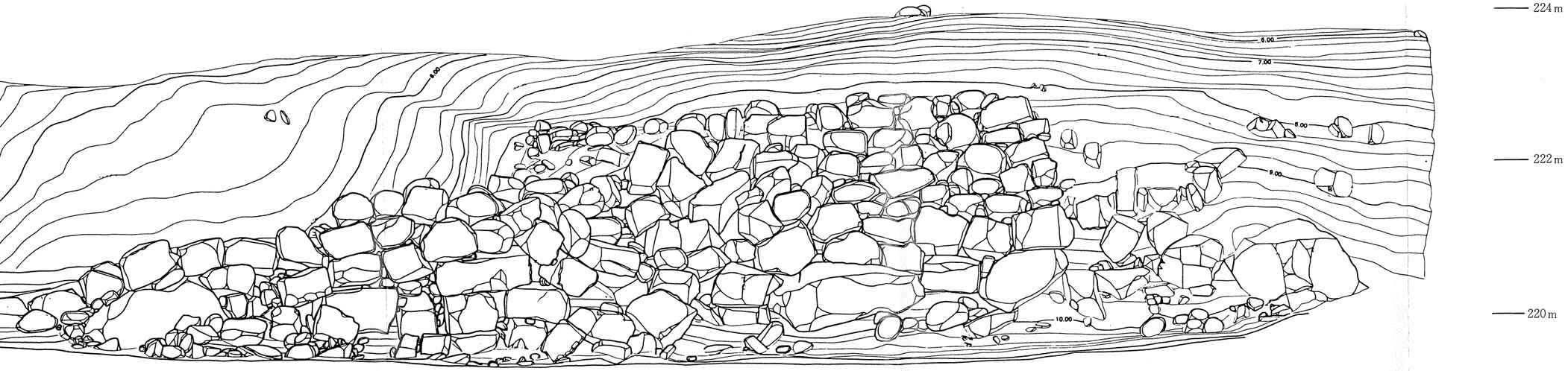
第27図　『岡城城下家中図』に見える道の屈曲部



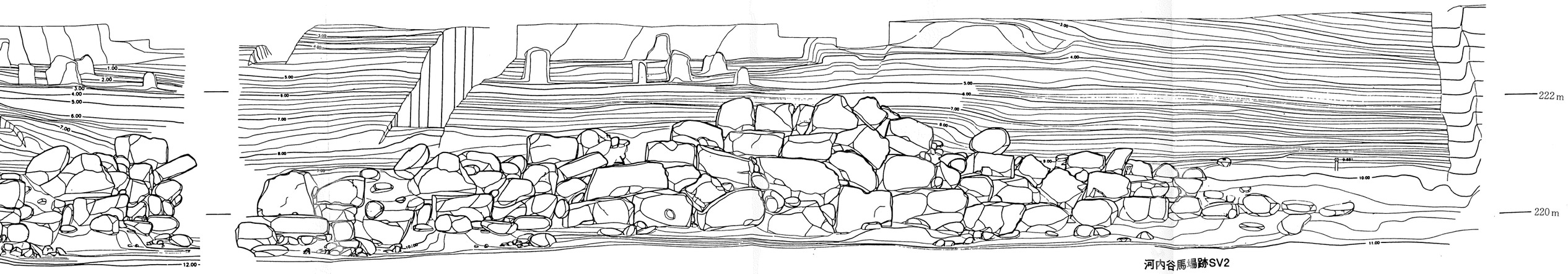
第28図　河内谷馬場跡ＳＶ１・ＳＶ２の位置（Ｓ＝１／500）
（太い矢印は第29図の見通しの方向）

河内谷馬場跡ＳＶ１

河内谷馬場跡ＳＶ２

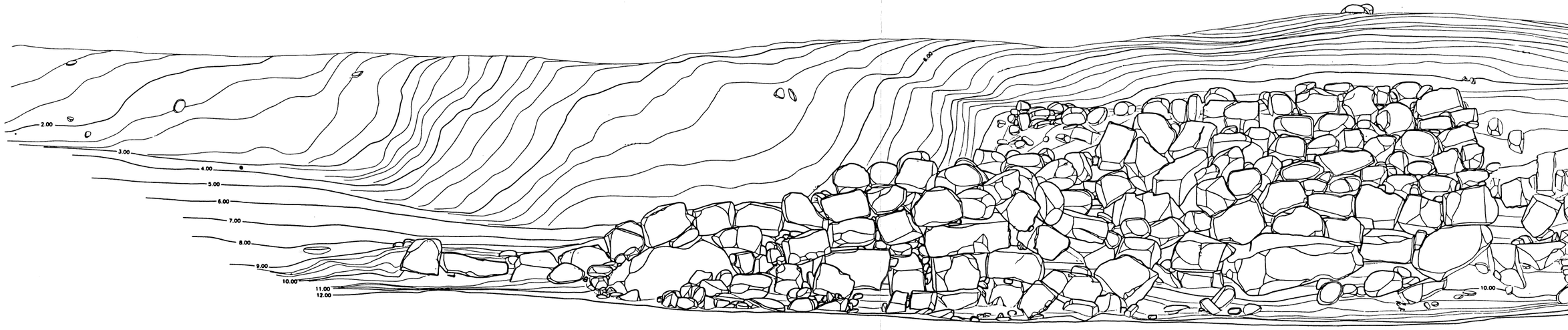


河内谷馬場跡SV1

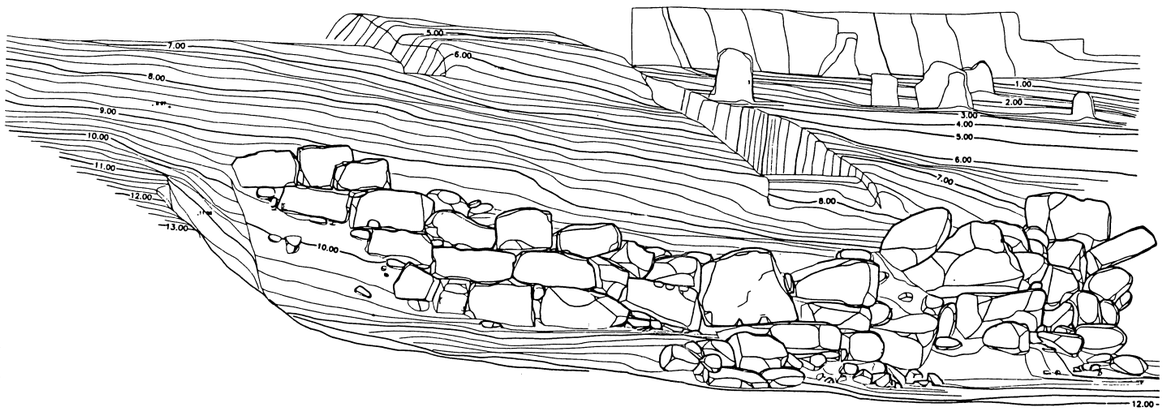


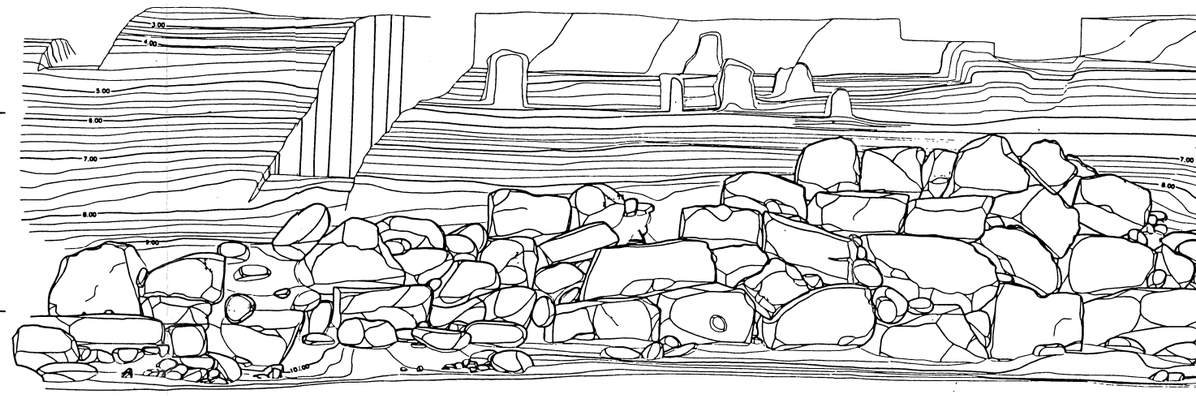
河内谷馬場跡SV2

第29図　河内谷馬場跡ＳＶ１・ＳＶ２（Ｓ＝１/60）



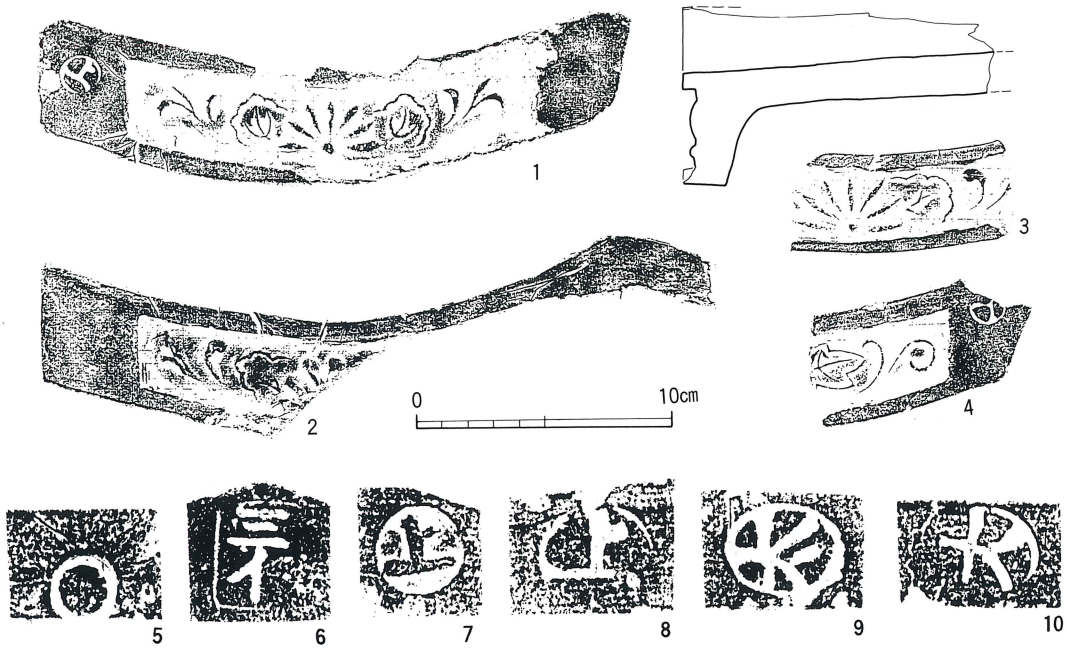
河内谷馬場跡SV1





0

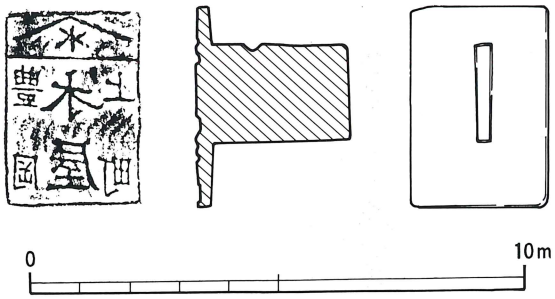
第29図　河内谷馬場跡ＳＶ１・ＳＶ２（Ｓ＝１/60）



第30図　河内谷馬場跡ＳＶ１周辺出土瓦（１～４はＳ＝１／３、５～10は実大）

の対比に関する最終的な結論を出すには至っていない。ＳＶ１・ＳＶ２とも石垣積みの手法に谷落し積みが認められる部分があり、構築年代は江戸時代後期と考えるのが妥当であろう。石垣周辺からの出土遺物についても、それらが直接の石垣の年代を示すものではないが、江戸時代後期以降のもののみが検出されている。

出土遺物（第30・31図）　第30図に示したものは、馬場地区石垣遺構ＳＶ１の周辺から出土した軒平瓦および平瓦に認められた刻印である。１～４は軒平瓦で、いずれも中心飾に半截菊花文をもち、葉文および子葉を有するモチーフが認められるものである。１・４には「上」の刻印を有する。５～10は平瓦に認められる刻印で、５は〇、６は「三イ」、７・８は「上」、９は「太」、10は「大」である。刻印のうち、６の「三イ」の「三」については岡藩の瓦窯が存在した三宅窯の略号である可能性が考えられ、９の「太」については三宅村の瓦師菊地太平治あるいは菊地太兵衛を意味する可能性が考えられるが、現状では最終的な結論に到達していない。７・８の「上」は品質保証を意味する「上製」の略号であろう。第31図に図示したものは銅印で、やはりＳＶ１周辺から採集したものである。印面には、地文の波状文の上に屋号と思われる「八水　豊岡　上町　木屋」の文字が認められ、朱肉の付着がみられる。また、摘み部には小さなくり込みが認められ、印の正位置の方向の目印としたものと思われる。岡藩城下の「上町」は本調査区より、直線距離にして２～2.5㎞東の地点に位置する町である。当該遺物が本遺跡にもたらされた経緯は明らかではないが、検出地点から考えて、大雨・洪水などの自然災害による水流により偶然運ばれた可能性が想定できるのかもしれない。



第31図　河内谷馬場跡ＳＶ１周辺出土瓦（Ｓ＝２／３）

小結　河内谷馬場については、その構築年代を直接に示す記録が存在していない。今回の土塁遺構の断ち割り調査でも、構築年代を示す遺物は出土していない。ただ、天明７年（1787）作成の『岡藩城下家中図』では、河内谷御茶屋と隣接する位置に描かれており、当初から御茶屋と馬場が計画的に造られていたと考えるならば、その年代は河内谷御茶屋の造営年代である元禄15年（1702）前後に求められる可能性が考えられる。また、後述する中川久祐屋敷跡と馬場の領域が一部重複しており、馬場の廃絶時期は中川久祐が河内谷別邸に移り住むとされる天保５年（1834）前後が考えられる。

河内谷馬場の土塁（西から）

馬場地区では、発掘調査以前から河内谷馬場の南側土塁と推定される土塁遺構が存在していた。土塁遺構は本来一直線状をなしていたと考えられるものが、西と東に途切れて残存していた。この途切れた位置の地下には堅固な構造をもつ馬場地区ＳＤ１が構築されており、土塁遺構と切り合い関係を有する可能性が高い。すなわち、馬場地区ＳＤ１は河内谷馬場の廃絶後、中川久祐屋敷の付属施設として構築されたと考える。また、残存する土塁遺構で西側に位置するもののみに２段階にわたる土塁形成土が認められ、最初のものは河内谷馬場に伴うもの、２回目のものは中川久祐屋敷跡に伴うものと推定された。また、この土塁遺構の断ち割り調査により、河内谷馬場の内法幅が4.6～4.7m前後であることも判明した。

階段遺構ＳＳ１と石垣遺構ＳＶ１は、上記の『岡藩城下家中図』中に対比できる可能性が考えられる表現がある。ただし、両者の絵図での位置関係と実際の位置関係が細部で狂いをきたしており、さらに慎重な検討が必要であろう。なお、上記の発掘調査での所見と絵図との対比により、河内谷馬場の本来の規模の想定が可能であると思われる。このことについては、Ⅳ(1)を参照されたい。